



厚生労働省 令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業
 北海道・北東北ブロック報告書

アールブリュット推進センター Gently



はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行によって、これまであたりまえにやっていたことが出来なくなっていました。特に舞台芸術分野の取り組みを行う方々からは、「活動が出来ていない」、「発表の機会がなくなってしまった」という声が多く聞かれました。本年度は、障害のある人の芸術文化活動を支援するセンターとして、第一に感染症拡大の防止に努めながら、皆さんの活動の支援を変わず行えるよう、オンラインでの取り組みなど新たなことにもチャレンジした1年間となりました。本書では、北海道・北東北ブロック広域センターの取り組みをまとめるとともに、青森県、岩手県の各支援センターの取り組みもあわせて紹介します。

今後ますます障害者の芸術文化活動に関する取り組みが盛んになっていくなかで、本書がその一助となれば幸いです。最後になりましたが、本ブロック事業や本書作成にあたってご協力いただいた皆様に心からお礼申し上げます。

アールブリュット推進センター Gently
事務局 社会福祉法人ゆうゆう

目次

はじめに	1
目次	1
障害者芸術文化活動普及支援事業とは	2
北海道・北東北ブロックについて	2
広域センター アールブリュット推進センター Gently	3
発表の機会の確保：舞台芸術	4
発表の機会の確保：美術	12
人材育成	20
相談支援	21
情報収集・発信	22
まとめ	23
障害者の文化芸術フェスティバルへの協力	24
支援センター 青森アール・ブリュットサポートセンター (AASC)	26
支援センター 岩手県障がい者芸術活動支援センターかだあと	32
センター一覧	38

障害者芸術文化活動普及支援事業とは

厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」はさまざまな障害者が芸術文化を享受し、多様な活動を行うことができるよう、地域における障害者の芸術文化活動を支援する体制を全国に普及し、障害者の自立と社会参加を促進することを目的としています。

2014(平成26)年から3年間を通じて全国12カ所で行った「障害者の芸術活動支援モデル事業」の成果やノウハウをもとに、2017(平成29)年から実施しています。

「都道府県」、「ブロック」、「全国」という3つの活動エリアが設けられ、それぞれのエリアに支援センター、広域センター、連携事務局といった支援の拠点が設置されます。2020(令和2)年度は、35都府県に支援センターが設置されたほか、広域センターが6ブロック、連携事務局が2カ所に設置され、活動を行いました。

北海道・北東北ブロックについて

北海道・北東北ブロックは北海道・青森・岩手・秋田の1道3県で構成され、前年度に引き続き青森と岩手に支援センターが設置され、社会福祉法人ゆうゆうが広域センターとして採択されました。北海道・秋田は未実施という状況が続いています。

○広域センター

アールブリュット推進センター Gently

○支援センター

青森アール・ブリュットサポートセンター (AASC)

岩手県障がい者芸術活動支援センターかだあと

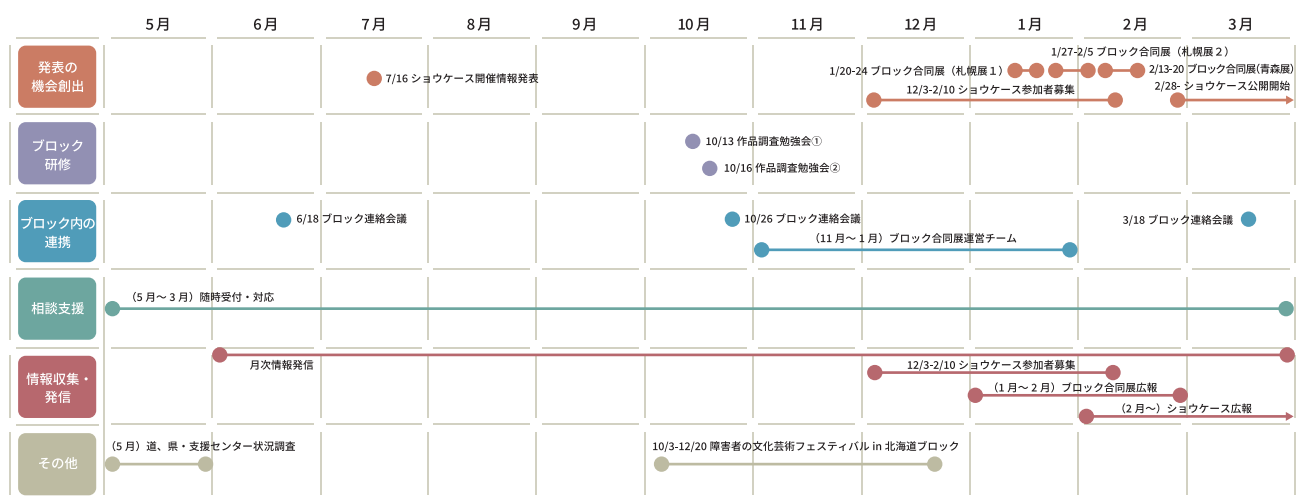


広域センター アールブリュット推進センター Gently

実施団体：社会福祉法人ゆうゆう

社会福祉法人ゆうゆうは「ひとりの想いを文化にする」をビジョンに、「福祉を福祉で完結しない」「ないものはつくる」という想いに立ち、地域のあらゆる人たちの暮らしを創造していくことを目指した福祉実践を展開しています。2015（平成 27）年 3 月には、障害福祉に取り組む団体、弁護士、学芸員、大学教員らとともに障害者の芸術活動支援を目的とした「北海道アールブリュットネットワーク協議会」を設立。同年 7 月には障害のある人の創作活動や支援者を支えることを目的に「アールブリュット推進センター Gently」を開設。2017（平成 29）年度から「障害者芸術文化活動普及支援事業」の広域センターとして、北東北各県と連携し、調査・発掘や発表の機会創出、支援体制の向上に取り組んでいます。

●事業状況



●事業概要

〈発表の機会の確保〉

- ・舞台芸術：アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台上がれ！」
- ・美術：北海道・北東北の福祉とアート「始まりを探して」

〈ブロック研修〉

- ・作品調査勉強会

〈ブロック内の連携〉

- ・ブロック連絡会議の実施
- ・ブロック合同展の企画運営

〈相談支援〉

- ・未実施県である北海道・秋田県を主な対象に随時受付・対応

〈情報収集・発信〉

- ・ホームページ、Facebook、Instagram を活用した情報発信
- ・各種メディアの活用

〈その他〉

- ・日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル in 北海道ブロックへの協力
合理的配慮の取り組み / ドライブインシアター形式でのバリアフリー映画上映（鑑賞機会の創出）

発表の機会の確保：舞台芸術

厚生労働省 令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業 北海道・北東北ブロック

アール・ブリュット ショウケース2020 オンライン「舞台に上られ！」

概要

公開開始 2021年2月28日（日）～

配信場所 アールブリュット推進センター Gently YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCHiP3YoEYHGvaSzEtCF4ohw>

主催 社会福祉法人ゆうゆう

協力 社会福祉法人あーと、社会福祉法人岩手県社会福祉事業団、北海道アールブリュットネットワーク協議会



関連企画 アール・ブリュットショウケース2020 オンライントーク

「今年度の見どころご紹介」「コロナ禍のチャレンジ：菅家正幸さんの映像制作」

実施成果：

出演者数 招待部門2組、公募部門24組 計26組（27作品）

再生回数 5,598回（2021年2月28日～3月31日）

参加者アンケート回答数：10件（回収率：38%）

公募部門 募集期間 2020年12月3日～2021年2月10日

報告・解説

アール・ブリュットショウケースは、これまで観客のいる舞台ホールで行ってきましたが、今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、YouTubeチャンネル上でパフォーマンス映像を公開するオンライン開催としました。

動画による参加を呼びかけた結果、公募部門24組（25作品）、招待部門2組、計26組27作品が集まりました。これは前年度の約2.5倍であり、出演者にとって映像を通じて多くの観客に観てもらうことへの期待と希望があることを改めて確認する結果となりました。技術的なハードルも懸念もされましたが、むしろ映像ならではの工夫や演出、多様なジャンルから意欲に溢れた作品が数多く集まりました。これまで出演が叶わなかった秋田県からの参加も得られ、移動や費用など、様々な理由で会場に行くことが難しかった方々にとって、動画やオンラインという方法により参加へのハードルが下がったと言えます。

招待部門は主催側で動画制作を行いました。感染症予防のため撮影を希望しない事業所や、コロナ禍で活動自体を休止しているグループも少なくなく、参加と制作は2組にとどまりました。

また岩手県の支援センターの協力で、やはりオンライン開催だった岩手県の「ふれあい音楽祭」より8組の参加がありました。例年であれば開催時期が重なり参加の叶わない方々が多数参加する結果となりました。

このオンライン開催の成果をふまえ、次年度以降もオンラインの活用など開催方法を見直し、北海道・北東北ブロックにより適した発表の場のあり方を検討していきたいと考えます。またブロック内の各道県で発表の場確保への取り組みにばらつきがあることから、舞台芸術に関する中間支援の育成があわせて課題と考えます。

アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台に上られ！」 プログラム紹介

招待部門

かんけまさゆき

菅家正幸（北海道）/ 伝統芸能

民謡「二声上げ音頭」「りんご節」「北海甚句」「ソーラン節」「江差馬子唄」



10年以上、額縁の絵や枠の絵を描いています。民謡を習っている彼の夢は、リサイタルを開くこと。それなら、いっそ自分の舞台を作ったら？スタッフの勧めに、大変乗り気になって、大きな画面を相手にひたすら描き始めました。夢の一步はかたるべの森美術館でのライブ、次の夢は、ツアーでしょうか？自分のステージを自分の作品で埋める、周りで見ている方もワクワクする。そんな日々を送っています。

この舞台セットは菅家さんの頭の中にあるイメージを形にしたものです。毎年、菅家さんは新たな舞台セットのイメージをたくさん教えてくださいます。それは少々難解ですがとても面白く、その想像力は年々豊かになっています。今回の舞台のテーマはメリーゴーランドとエレベーター。何故にそのテーマ

なのかはわからない。でもそれを具現化するために職員達も一緒になって面白がって菅家さんと相談しながら少しずつ形にし、セットアップの準備を重ね、この舞台を創りました。

舞台での演出は、曲目、曲順を含め菅家さんが全て決めています。いつものように目の前にたくさんのお客さんがいてくれたら、もっとトークも冴え渡りアドリブも飛び出していたはず。アンコールも3回はやっていたはず。いつかまた菅家さんの生の歌声とパフォーマンスをお客様に届けられることを願いながらすでに菅家さんは次回の舞台についての計画を始めています。

りょういく

のびっこ寮育センター（岩手）/ 伝統芸能

和太鼓「元気太鼓」



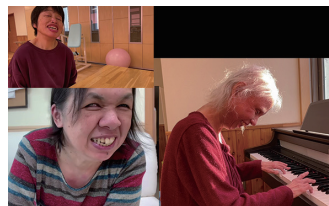
のびっこ太鼓は障がいのあるこどもや青年たちとその家族、スタッフで構成されています。17年前に劇団青年座の山口晃先生にオリジナル曲を作ってくださいました。最初はバラバラな音でしたが、仲間と音をあわせる心地よさを知ることができ、元気に太鼓演奏に取り組んでいます。

元気太鼓は、5曲ある中で5番目にできた曲です。覚えやすいので、何度も演奏しています。元気！という掛け声を出すので、元気になれると評判がいいです。

公募部門



あいとうがくえん
愛灯学園おとだらけ
北海道 / 音楽
「上を向いて歩こう」



あいとうがくえん
愛灯学園おとだらけ
北海道 / 音楽
「バレンタインキッス」



あさり
浅利かれん
青森 / 音楽
ベートーヴェン：ピアノソナタ
「悲愴」第2楽章



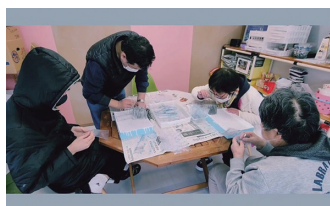
いとともかず
伊藤友和
岩手 / 伝統芸能
尺八「宮城長持ち唄」「外山節」「最上川舟唄」「南部牛追い唄」



いわてけんりつもりおかしくしえんがっこう
岩手県立盛岡視覚支援学校
岩手 / 音楽
「裸の心」「Top of the world」「メリーポピンズメドレー」



おばこシスターズ
秋田 / 伝統芸能・音楽
「大正寺おけさ」「浜辺の歌」



おらんど
青森 / 美術
共同制作「爪楊枝アート」



げきだんはすかつぶ
劇団HASCAP
北海道 / 演劇
「外郎売りの台詞」



コールひまわり
岩手 / 音楽
合唱



たいこしゅう かぜ
さっぽろ太鼓衆「風」
北海道 / 伝統芸能
和太鼓「村場流八丈太鼓」



さっぽろ もり
札幌なかまの杜クリニック
ボイトレ部
北海道 / 音楽
バーチャル合唱「群青」



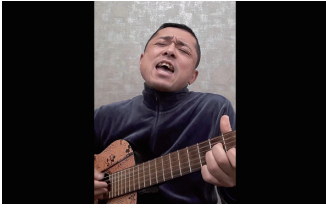
しおやよきょうだん
塩谷余興団
北海道 / 音楽・演芸など
詩吟、桑田バンド、彦星4人組、BOWWOW カタコリーズ、sweet ピエロ



しゃかいふくしほうじんこうりんかい
社会福祉法人光林会
岩手 / 伝統芸能
「ルンビニー百姓踊り」



たかだてしょうた
高館将太
岩手 / 音楽
「千の風になって」「アンパンマンマーチ」「オネスティ」



たちばなしゅうじ
立花収慈
岩手 / 音楽
ギター弾き語り「カリント工場の
えんとつの上に」「ワルツ」「ノス
タルジア」「僕のパラード」「紅炎」



ちいきせいかつしえん あゆむ
地域生活支援センター歩夢
岩手 / 体操・音楽
「幸せなら手をたたこう」「wa に
なっておどろう」



つきみのさぎょうしょ
月見野作業所
青森 / 伝統芸能
よさこい「よっちょれ」



ハランベ
北海道 / 音楽
アフリカ音楽



ハンディキャップシアター
ショウタイム
北海道 / 演劇
「にじいろ演劇学校」



ほうかごとう
放課後等デイサービス
ほたて
北海道 / 演芸
エアピアノ演奏・落語



ほっかいどうしらかばこうとうようごがっこう
北海道白樺高等養護学校
たいこぶ
太鼓部
北海道 / 伝統芸能
和太鼓「導火線」(大元組)



ほっかいどうもんべつこうとうようごがっこう
北海道紋別高等養護学校
しんたいそうぶ
新体操部
北海道 / ダンス



みすたー たつや
Mr. 達哉とラン&ドリー
なかま
の仲間たち
北海道 / 音楽・ダンス
「香水」「Monster」「パブリカ」
「Make you happy」



やまもとだいじ
山本乃司
岩手 / 音楽
ギター弾き語り「大きな古時計」
「すべての人の心に花を」「スタ
ンド・バイ・ミー」



やまもとたかひろ
山本貴大
岩手 / 音楽
ギター弾き語り「おばあちゃん」
「日々」「生きるってことは」「皆
の帰る家」

アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台に上られ！」 参加者の声

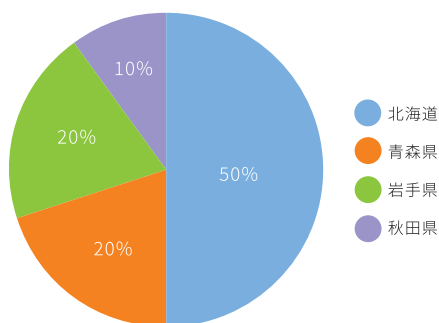
動画の公開後、参加者を対象としたアンケートを実施しました。参加理由（問3）として多く挙げられたのは、「発表の場がほしい」「周りの人に見てほしい」「広く色々な人に見てほしい」「福祉の取り組みを発信したい」などといった、自分たちの活動を見てもらう、知ってもらうことへの意欲に関する回答でした。また、「例年参加していたイベントが中止になったことで活動することへのモチベーションすらも失われつつあった」という声もありました。舞台芸術分野の取り組みにおいては、「発表」が目標やモチベーションのひとつになっていることがわかります。問7では、例年と令和2年度の発表の機会の回数の変化が明らかになりました。回答者全体の平均回数が例年であれば3.2回あるのに対して、本年度は1.4回にとどまっています。参加にあたって苦労したことや難しかったこと（問6）に関する回答では、その他として「業務内で編集が出来ず、サービス労働となった」という声が届きました。これは福祉施設等の職員の方からのコメントであると思われますが、理解と意欲のある支える人がいなければ、活動が継続できなかったり、発表する機会に参加できないという現状を抱える人たちは少なくないと考えます。舞台芸術分野に限りませんが、障害のある人の芸術文化活動を取り巻く環境はまだまだ整っておらず、不安定であるといえます。こうした状況を変えていくために、一支援者がサービス残業などをして取り組むのではなく、必要な支援として組織で取り組んでもらうためにセンターとしてできるアプローチを考えていく必要を改めて感じます。

参加者アンケート

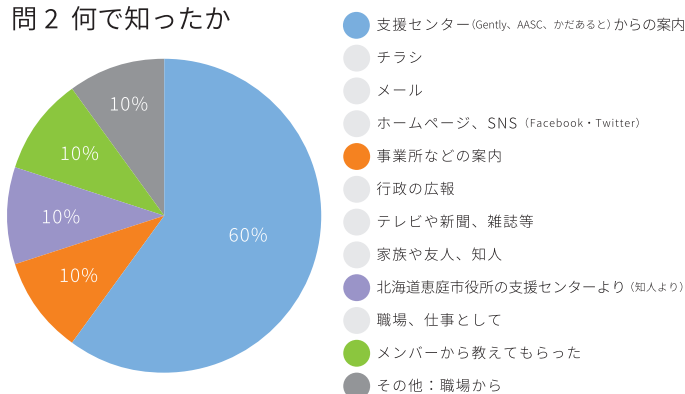
対 象：アール・ブリュットショウケース 2020 参加者（26 組）

回答数：10 件（回収率：38%）

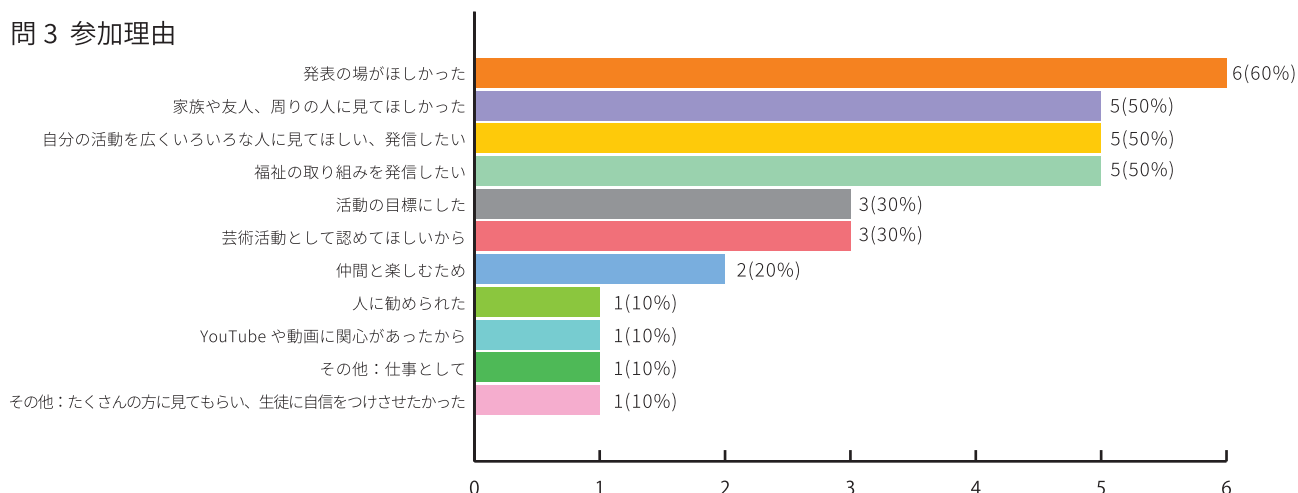
問 1 住まい



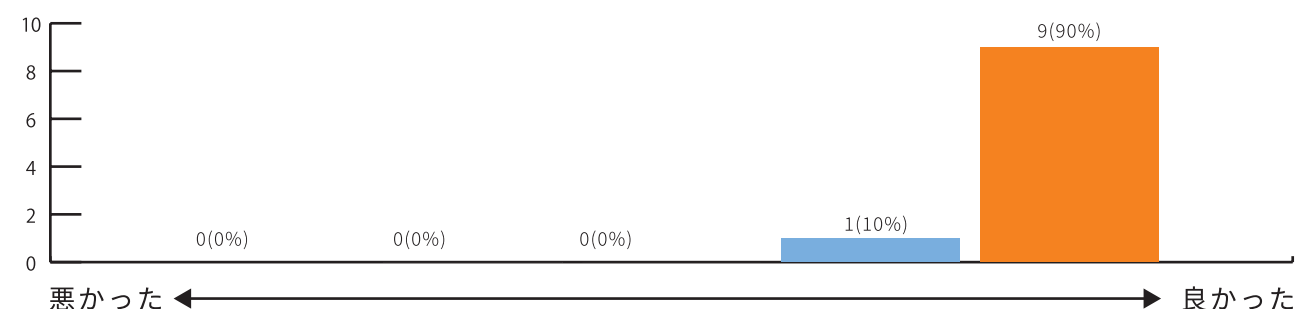
問 2 何で知ったか



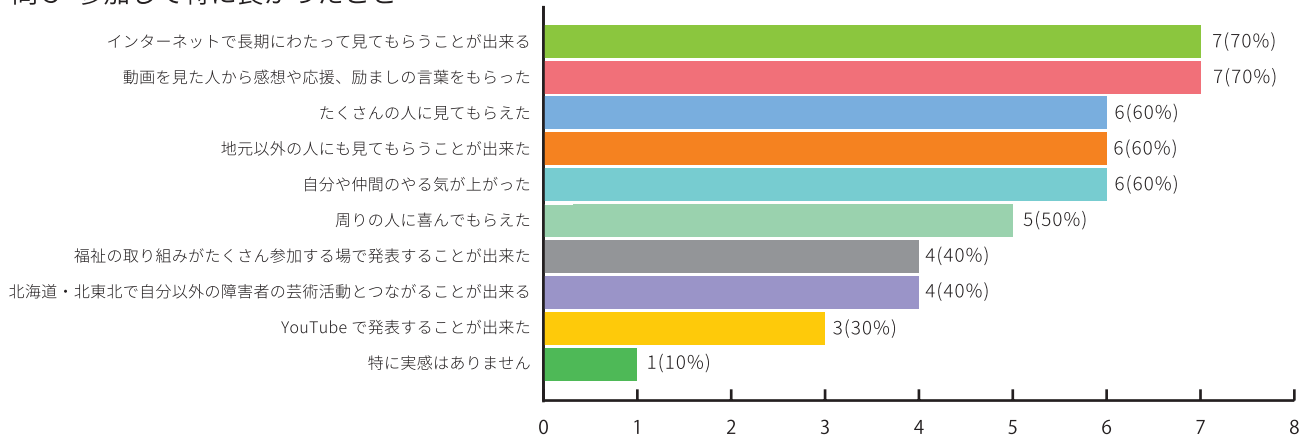
問 3 参加理由



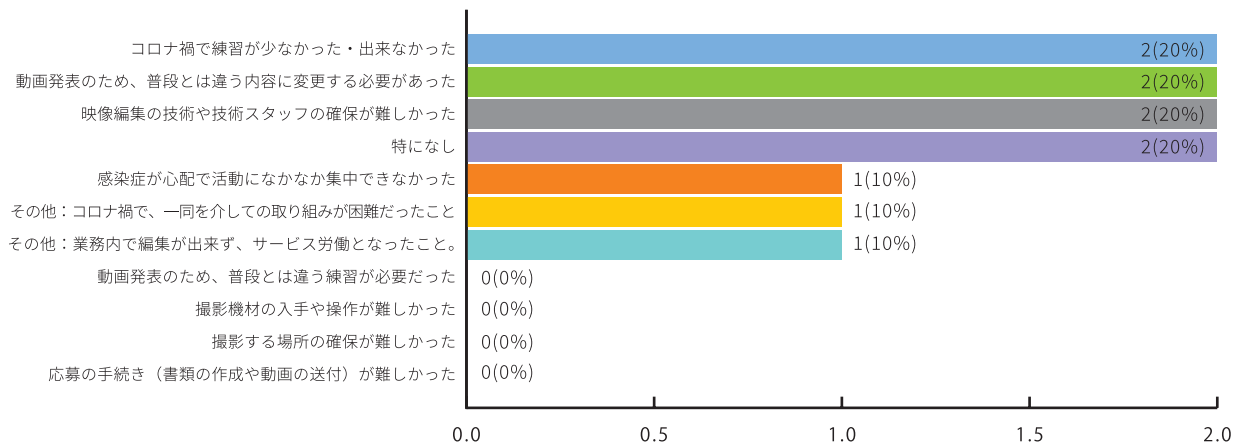
問 4 どう感じたか



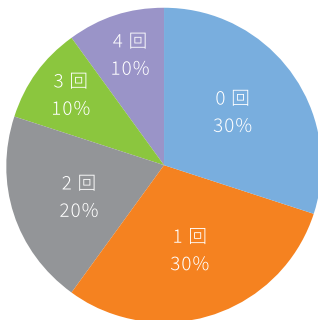
問5 参加して特に良かったこと



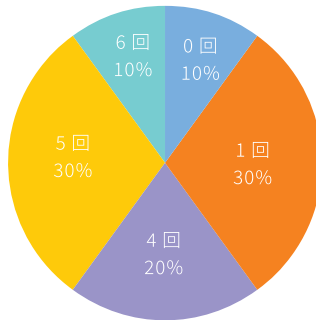
問6 参加にあたって苦労したことや難しかったこと



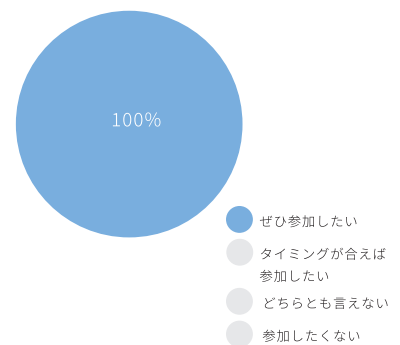
問7-1 令和2年度の発表活動回数 (ショウケースは除く)



問7-2 例年の発表活動回数



問8 今後もショウケース(オンライン)に参加したいと思うか



今後ショウケースに期待する点、改善してほしい点 (抜粋)

- ・評価の動画で声が聞き取りにくいところがありました。
- ・ショウケースの存在を知ること、参加を希望する人たちは増えると思いますが、増やし方が難しいのかなと思いました。(「アールブリュット」のとらえ方やなんでも受け入れるのかどうか)
- ・たくさんの皆さまに観て頂きたいので、広告をもっとすると良いと思いました。アールブリュットをわからない方々も多いようです。

その他ご意見ご感想 (抜粋)

- ・県外の方の発表を見てよかった。
- ・初めての参加でしたが、参加した本人たち、支援者としても、普段はタブレットやモニターの向こう側にあるYouTubeチャンネルを通して発表できたことが、何よりも喜びやモチベーションになったと思います。

- ・部活動を新たに立ち上げたときから、3年間必死に頑張ってきた3年生の発表の機会がなく、どうにかして、いろんな方々に発表したいと思っていた際のお知らせでしたので、本当に有り難かったです。

北海道紋別高等養護学校新体操部の皆さんからメッセージをいただいたので、一部ご紹介いたします。

- ・初めてオンラインに参加して、すごく緊張したけど新体操を発表できてうれしかったのと沢山の人の見てもらえたので良かったです。
- ・新型コロナウイルスの関係で大会がなくなってしまったけれど、私たちが頑張ってきた演技や技を披露する場所を作ってくださいありがとうございます。
- ・昨年は大会がなく、3年生がとても悲しんでいました。でも先生がオンラインをするって言ったら3年生のみなさんが目がキラキラさせて毎日練習をしていました。1、2年生は、3年生とやるのが最初で最後だったので毎日練習を頑張っていました。

関連企画：アール・ブリュットショウケース 2020 オンライントーク

配信場所 アールブリュット推進センター Gently YouTube チャンネル

その1「今年度の見どころご紹介」

ゲスト：鈴木京子（国際障害者交流センター ビッグ・アイ プロデューサー）

尾形渉（岩手県障がい者芸術活動支援センターかだあと）

進行：大友恵理（アールブリュット推進センター Gently）

多くの動画が集まったショウケースの全体像を伝えるために、障害者の舞台芸術に携わる二人のゲストを交えて、参加団体や作品にみる今年度の特色などを紹介する動画を配信しました。鈴木さんからは、全国で舞台発表の中止が多いなかオンラインで開催できたことの意義が述べられました。尾形さんからは岩手県「ふれあい音楽祭」がオンライン開催に至った経緯や苦労、参加者のことにも触れていただきました。今年度のショウケースはオンラインならではの多様な映像が多く集まり、ソロ演奏を披露した方々のポテンシャルの高さやサードプレイスとしての活動の意義、伝統芸能への取り組みの多さとその可能性、自宅や事業所の小さな一角を舞台にした発信、スポーツ競技や美術からのジャンルを超えた表現、難病の方々による音楽発表など、参加作品を通じて舞台芸術へ取り組む意義を一つ一つ紐解くような内容となりました。



トーク映像より

その2「コロナ禍のチャレンジ：菅家正幸さんの映像制作」

ゲスト：小町谷健彦（SHASOW MOVIE 代表 映像プロデューサー）

渡辺勝利（社会福祉法人当麻かたるべの森 生活支援係長）

谷口ナツコ（社会福祉法人当麻かたるべの森 創作アドバイザー）

進行：大友恵理（社会福祉法人ゆうゆう）

招待部門の一人、菅家正幸さんの映像制作では、感染予防対策の観点から撮影スタッフの訪問が難しい状況にありました。そこで関係者で相談し、撮影は映像プロデューサーの遠隔サポートのもと支援員が行い、その映像をプロデューサーが編集して仕上げるという方法をとりました。Zoom や LINE を使って何度か打ち合わせを行い、撮影機材・音響機材、撮影場所の確認と調整、それからテスト撮影、撮影本番へと進められ、映像は無事完成しました。

この制作に携わった方々をオンライントークへ招き、制作について振り返りました。

撮影を担当した渡辺さんからは、菅家さんの日頃の活動には触れていたものの、撮影の経験があまりなくて戸惑ったとコメントがありました。撮影当日も都度その場で質問ができず不安もあったそうですが、遠隔で小町谷さんにテスト撮影をしたものを確認してもらい、機材の位置などを調整して、演奏する菅家さんのいくつかの表情を押さえることができました。

なお、今回は事業所の機材に加えて小町谷さんがビデオカメラ1台を提供し、ビデオカメラ1台とiPadとスマートフォン、計3台で撮影されました。結果的に現場の状況の都合で様々なフォーマットで撮影された映像を小町谷さんの方でまとめることになりご苦労もあったようですが、音質も良く違和感のない映像に仕上がっています。遠隔サポートとなることから「技術的な細かな問題は、少しずつ解消するごとに質が上がっていくので」といかにシンプルに撮影を行うかを念頭に対応したと小町谷さんは話しました。

また小町谷さんからは、とくに渡辺さんが事前に撮影したインタビュー映像で菅家さんや他の利用者が見せたような表情は小町谷さんでは撮れなかったのではないかと、信頼関係があってこそそのようなシーンが撮れていたと、支援者による撮影の良さが挙げられました。

菅家さんの舞台美術制作を支えてきた谷口さんは、「限られた時間で舞台転換する実際の舞台上では実現が難しかったかもしれない」と述べ、また「映像も素晴らしいけど、菅家さんは観客がいたらもっと歌が素晴らしいになるので、生の歌を聞きたいと思ってほしい」と話しました。



トーク映像より

『身近なツールを使って撮影！ 動画撮影ガイド（簡易版）』

ショウケース参加希望者に向けて、応募作品の撮影をサポートするツールを作成しました。

厚生労働省 令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業 北海道・北海道ブロック 広域センター
アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台上がれ！」
身近なツールを使って撮影！ 動画撮影ガイド（簡易版）

このガイドでは、ビデオカメラや本格的な機材がなくても応募できるよう、スマートフォンなど身近な機材で動画を撮影するコツを簡単ではありますがご紹介いたします。
※機材の操作方法については、お手持ちの機材の説明書などをご参照ください。

1. 動画制作の流れ

1 準備 ・機材 ・撮影場所 ・撮影計画	2 撮影 ・機材の設置 ・テスト撮影 ・撮影本番 →撮影のコツ	3 編集 ・撮影動画をコンピュータやスマホで編集	4 応募 ・動画または ・動画データを ・事務局へ送付。
-------------------------------	---	-----------------------------	---------------------------------------

1

2. 準備
(1) 機材

○カメラ 1～2台
お手持ちのカメラを最低1台。
例えば…

- ・スマートフォン（iPhone・Android）
- ・家庭用ビデオカメラ
- ・コンパクトデジタルカメラ
- ・一眼レフカメラ・ミラーレスカメラ

家庭用ビデオカメラは、操作や機能が優れているので安定して撮影することができます。
スマートフォンは手軽に高画質で撮影できます。画面がプレイしやすいので工夫して撮影しましょう。
データを保存する空き容量・ストレージも確保しましょう。

○三脚
撮影途中でカメラのぐらつき防止します。
スマホで使用する場合は、取り付けるアダプターも用意しましょう。

○その他
マイクや録音機器があれば、よりよい音質になります。

(2) 撮影場所
選ぶポイント：
・パフォーマンスを出せる広さ
・十分な明るさがあること。（照明や演出をしない場合）
・スマホやカメラの性能でカバーできる場合もあります。
同じ場所でも時間帯によって明るさが違う場合もあるので注意しましょう。
・周囲がうるさくないこと。

2

(3) 撮影計画
パフォーマンスの見せ場、出演者の表情、クライマックスなどをイメージして、画面の中にとりこめるか、画面とカメラの位置など、撮影するイメージを事前に整理しておきます。出演者の顔が逆光で暗くなる場合もあるので、立ち位置も考えましょう。
カメラを2台以上使う場合は、役割分担を決めておくこともスムーズに撮影できます。例えば、三脚で固定するカメラは全体と音声担当、手持ちカメラは移動してクローズアップやいろいろな角度から撮影するなど。
また、全体を通して一気に撮影する方法と、場面を一つずつ撮影したものを編集して全体を繋げて完成する方法もあります。

2. 撮影

(1) カメラの設置（設定のポイント）
・画面がクルクル回らないよう、「ロック」に設定します。
・三脚を使用する場合は、カメラの画面が水平になるよう調整します。
・手ブレ補正機能がオフになります。
・カメラの向きは、撮影時に気づかないようスリッパに貼ります。
※カメラの設定や操作方法については、お手持ちの機材の説明書等を参照してください。

(2) テスト撮影
本番前にカメラを回してみ、画面の明るさ、音声や明るさなど十分収録できるか確認します。また、余計な物が映っている画面の外へ移動します。

(3) 撮影開始・撮影のコツ
・カメラの動きはゆっくり控えめに
カメラの動きやズームが激しいと、視聴者が見づらい動画になります。
ゆっくりとしたカメラワークは手ブレ防止にもなります。
・手持ちで撮影する場合は、両足を揃えてカメラを持つとぐらつきにくくなります。
・音声はカメラと別の機材で録音すると、安定した音質を確保できます。
・撮影した動画をその場で確認しながら、何回か撮影してみましょう。

3

3. 編集

撮影した動画をそのまま応募してもよいですが、アプリを使って複数の動画や音声を一つにまとめた編集もできます。
コンピュータに標準インストールされている動画編集ソフト/アプリは、Windows「フォト」、Mac「iMovie」などがあります。

4. 応募

アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台上がれ！」では、2種類の 방법으로応募を受け付けています。
→ 応募用紙(Word)はこちら。

○郵送
DVD や USB メモリなどのメディアに保存して、応募書類を添えて郵送

○データ送信
(1) インターネットの大容量ファイルサービスに、応募する動画を登録
例えば…
・ギガファイル便 <https://gigafile.nu/>
・グーグルドライブや iCloud などのオンラインストレージ
※スマホで送信する場合は、Wi-Fi 環境での送信を推奨します。

(2) (1)で動画を登録した URL と応募書類を事務局へメールで送信
メール送付先: genty@yu-yu.or.jp

ご応募・お問い合わせはこちらまで。

アール・ブリュット推進センター Genty (ジェントリー) 担当: 大友・青崎
〒061-0231 北海道石狩市東区六軒町 70-18 社会福祉法人 ゆうゆう内
TEL 0133-22-2896 FAX 0133-23-0811
Eメール genty@yu-yu.or.jp
<http://genty-artbnt.com/>

4

発表の機会の確保〈美術〉

厚生労働省令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業

北海道・北東北の福祉とアート

始まりを探して

本展は、障害のある人の創作活動のはじまりや作品の変遷について考える展覧会です。作品の変化をたどると、創作活動にまつわるストーリーや工夫、意味などが見えてきます。彼らの創作は、素朴な興味やささやかな行為から始まっているものも少なくありません。もしその密かな行為が誰かの目に留まっていなかったら、今、私たちがその作品に触れることもなかったかも知れません。本展を通じて、障害のある人の表現をより身近に感じてもらうとともに、みなさんのまわりで「作品のはじまり」を見つけるきっかけになれば幸いです。

札幌展1

会期 2021年1月20日（水）～1月24日（日）

会場 JRタワープラニスホール

関連企画 オンライントーク「帯広・愛灯学園の創作活動」

札幌展2

会期 2021年1月27日（水）～2月5日（金）

会場 NAKAHARADENKI Free Information Gallery

主催 社会福祉法人ゆうゆう、社会福祉法人あーと、社会福祉法人岩手県社会福祉事業団

協力 NPO 法人アートリンクうちのあかり、株式会社中原電気商会

助成 厚生労働省令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業

青森展

会期 2021年2月13日（土）～2月20日（土）

会場 青森県立美術館コミュニティギャラリー

主催 社会福祉法人ゆうゆう、社会福祉法人あーと、社会福祉法人岩手県社会福祉事業団

協力 NPO 法人アートリンクうちのあかり、青森県立美術館、アウトプット展実行委員会、あおもりインクルージョンネットワーク

後援 株式会社デーリー東北新聞社、青森朝日放送株式会社、東奥日報社、東奥日報文化財団、陸奥新報社、RAB 青森放送株式会社、株式会社青森テレビ、公益財団法人こころすこやか財団、一般社団法人青森県手をつなぐ育成会、青森県自閉症協会

助成 厚生労働省令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業、令和2年度青森県障害者芸術文化活動普及支援事業

同時開催 「青森ありのままの表現展」

出品者 石井行文、佐々木早苗、佐藤光、佐藤里佳、T.K、鉄地河原勝彦、仁井田晶子、

西塚浩彦、野崎浩司、平野友愛、冬澤千鶴、musou、吉田幸敏（計13名）

入場者数：

札幌展 1 209 名

札幌展 2 393 名

青森展 433 名

合計 1035 名

来場者アンケート回答数：

札幌展 1、2 72 件（回収率：11%）

青森展 70 件（回収率：16%）

報告・解説

2017 年度から 4 度目となる今年度のブロック合同展は、過去 2 年間で開催していない北海道と、支援センターから要望のあった青森県での開催となりました。企画運営チームとして広域センターと 2 つの支援センターが意見交換をしながら協議し、特に青森県から挙げられた「障害者の創作活動に対して関心は広がっているが、事業所で実際に取り組むまでに至っていない」という課題に対して、障害者が創作に取り組むきっかけや作品の変遷を紹介することで、支援者の取り組みにつなげることを目指しました。3 つのセンターによる推薦と、秋田県からは、秋田市の公募展事務局を担っている NPO 法人アートリンクうちのあかりの協力のもと、北海道・青森県・岩手県・秋田県から 13 名の作家が選定され、約 380 点の作品を紹介しました。アンケートでは、福祉施設や病院に勤める方から、「本人が本人らしくのびのびと過ごせる場で生活できるということについて改めて考えさせられました。今後の方向性を考える良いきっかけとなりました。」「ご自身の強みを最大限活かして生きておられる方々の作品を見ることができ、心うごかされました。」といった声が届いたことから、一定の成果を得られたと考えます。

支援センターコメント

青森アール・ブリュットサポートセンター（AASC） 譚詩鏞

青森アール・ブリュットサポートセンターが開所して以来、これまで 4 回の展覧会を開催してきました。当初は、多くの人たちが「作品」の概念を一般的に上手だとされる絵画などをイメージしていたことが推測され、あまり作品の応募が集まらなかったこともあり、まずは県外の作品を紹介し「作品」の概念を再構築することとし、広域センターの支援の下で北海道・北東北ブロック合同展の青森開催に積極的に取り組んできました。今年度開催したことによる単年での成果は把握できていませんが、これまでの複数回にわたる合同展の開催で青森県開催の公募展の応募数も増えてきており、令和 2 年度は 180 点の応募がありました。このことから県外の作品に触れることによって作品の概念が再構築されてきたことがうかがえます。

新型コロナウイルスの流行で展覧会の実施自体が危ぶまれる中、今年度の青森会場においては 433 人の来場があり、盛況に終えることができました。以前からの課題として、事業の準備期間の確保の都合から、展覧会を足場の悪い冬期間に開催することが定型化していることがあげられ、来場者の範囲を広げる方策を考える必要があると考えます。

合同展への参加を通じて青森アール・ブリュットサポートセンターが得た学びとして、こうした発表の機会に応じるためにセンターが把握している作品や作家のデータ作成や、発表の機会を広げるために計画的に県内各地での企画展を実施するなどの必要性を感じています。



北海道・北東北の福祉とアート 始まりを探して 事例紹介

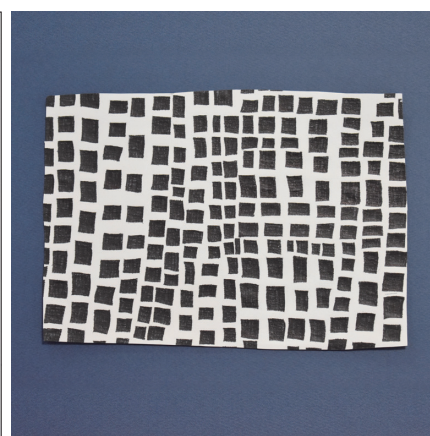
佐々木 早苗（ささき さなえ）

ひとつの創作スタイルを続け、ぱたっとやめて新たなスタイルを始める佐々木早苗さんの創作は自室で描いていた格子状の黒のボールペン画をスタートに「多色でのボールペン画」、「刺繍」、「チラシやカタログへの書き込み」などを経て、現在は丸く切り取った画用紙に同心円に色を塗っていくスタイルを続けています。自分で好みのサイズに切り取って色を塗り、机の脇の仕切りに備え付けられた台紙に貼っています。一時、マスキングテープを使用した創作に変わる兆しを見せましたが、現在は同心円に色を塗るスタイルに戻り、丸い紙がどんどん小さくなり、配色も落ち着いた色になり、ゆるやかな変化を続けています。

自室に好きなチラシや絵を貼り装飾する彼女にとっては、この創作スタイルも空間を装飾する意図があるのではないかと思います。居室や台紙という制限が無ければどんなものが出来上がるのか、彼女が作ろうとしている空間がどんなものなのか、私たちはその一端を目にすることしかできません。しかし、90 × 180 cmの平面から感じられる空間は壮大です。



《無題》



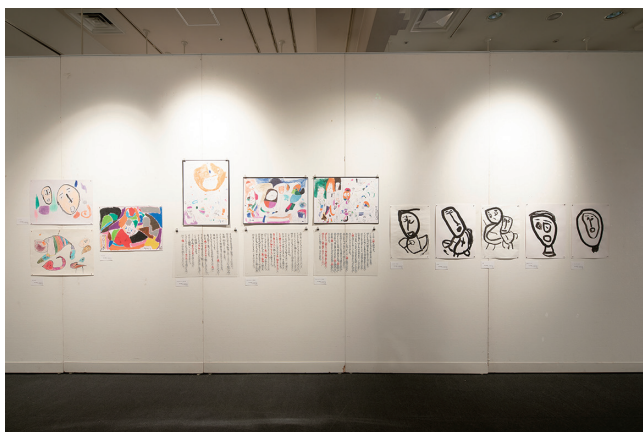
《無題》

鉄地河原 勝彦（てっちがわら かつひこ）

愛称はてっちさん。かたるべの森美術館に保管されている最初期のものは2004年の作品ですが、その頃から現在まで核となる部分は変わらずに長年制作活動を行っています。筆を持ったら迷いなく大胆に筆を走らせ、自由に豊かな形、表情をした人や生き物たちを次々と生み出していきます。

2016～17年には、絵にあわせて、それにまつわる物語を創作支援スタッフが聞き取り、代筆するかたちで「きょちゃんシリーズ」が制作されました。きょちゃんシリーズはてっちさんと周りの人が登場して敵と戦う物語となっており、物語の中で登場人物は生と死を行き来します。一見ファンタジーにみえますが、彼自身の生活や考え方も詰め込まれ、それが見え隠れしています。

最近では、五百羅漢図に挑戦。白い紙にシンプルな線でさまざまな人が描かれており、一週間に10枚程度生み出され続けています。本展では5点を抜粋して紹介しました。



左から2004年頃～現在までの作品を並べました



musou（むそう）

musouさんは小さなころから絵を描くことが好きで続けています。電車が好きで、映画もよく見ています。当時大人気だったハリーポッターにはまった頃は、その舞台となったロンドンの風景がよく絵の中に登場しました。旅行も好きで家族と一緒に訪れた場所もよく絵の題材になっています。東京、横浜、大阪などが、実際の町並みに基づいた描写やちょっとした細部も描き込まれ、ポップな作風の中にどこかリアルさを感じさせます。

高校生の頃、新しいシリーズが生まれました。「イナホ王子」が旅をして様々な場所を訪れ、人と出会って交流するさまが描かれています。musouさんは登場人物にキャラクター設定をしています。作品一つ一つが物語を持っているのです。

彼は学校を卒業して、夢の一つを叶えました。それは「パン屋に就職すること」。パン屋にまつわる作品も生まれました。彼は初めて絵本を手掛けました。クラウドファンディングを通じて多くの人から支援を受け、これも形になりました。

近年手掛けているシリーズには、高校時代より続く「イナホ王子」に加え、働く電車たちの物語「つうきんでんしゃトーマス」や彼が考案する架空の企業「グリーンフロンティア」などがあります。働くことや日々の暮らし、社会への関心事などに着想を得ながら作品を生み出しています。



musou 展示風景



平野 友愛（ひらの ともえ）

1999 年生まれ、2020 年現在 21 歳になります。養護学校時代から絵を描くことが大好きで自宅や福祉施設、養護学校等あらゆる場所でのびのびと絵を描いていました。自身の住む街をテーマに作品作りに励み、学校の昼休みに地図の絵をセロテープで繋ぎ合わせたのをきっかけに作品がどんどん大きくなっていきました。青森アール・ブリュットサポートセンターで開催された公募展に「思いでのちず」という作品を応募しました。彼女は、「養護学校時代のみんなどの思いを思い浮かべて描いた。」と話しており、見事大賞に輝きました。

しかし、2019 年 1 月に彼女にとって大きな転機となる出来事が起きます。それが、アイドルグループ嵐の 2020 年いっぱいでの活動休止でした。応援していた彼女にとって非常に辛い出来事であったと思います。そのニュースを受けて、彼女の作品作りもそれまでと大きく変わり嵐の曲をモチーフにした創作が始まりました。およそ 2 年間で 26 作品となり、活動休止以降も精力的に創作は続いています。嵐を含めた彼女の好きなことやものは創作活動の意欲へと繋がっているように思えます。私たちに新たな価値観や表現を見せてくれるような作品を今も創作しているでしょう。



平野友愛展示風景

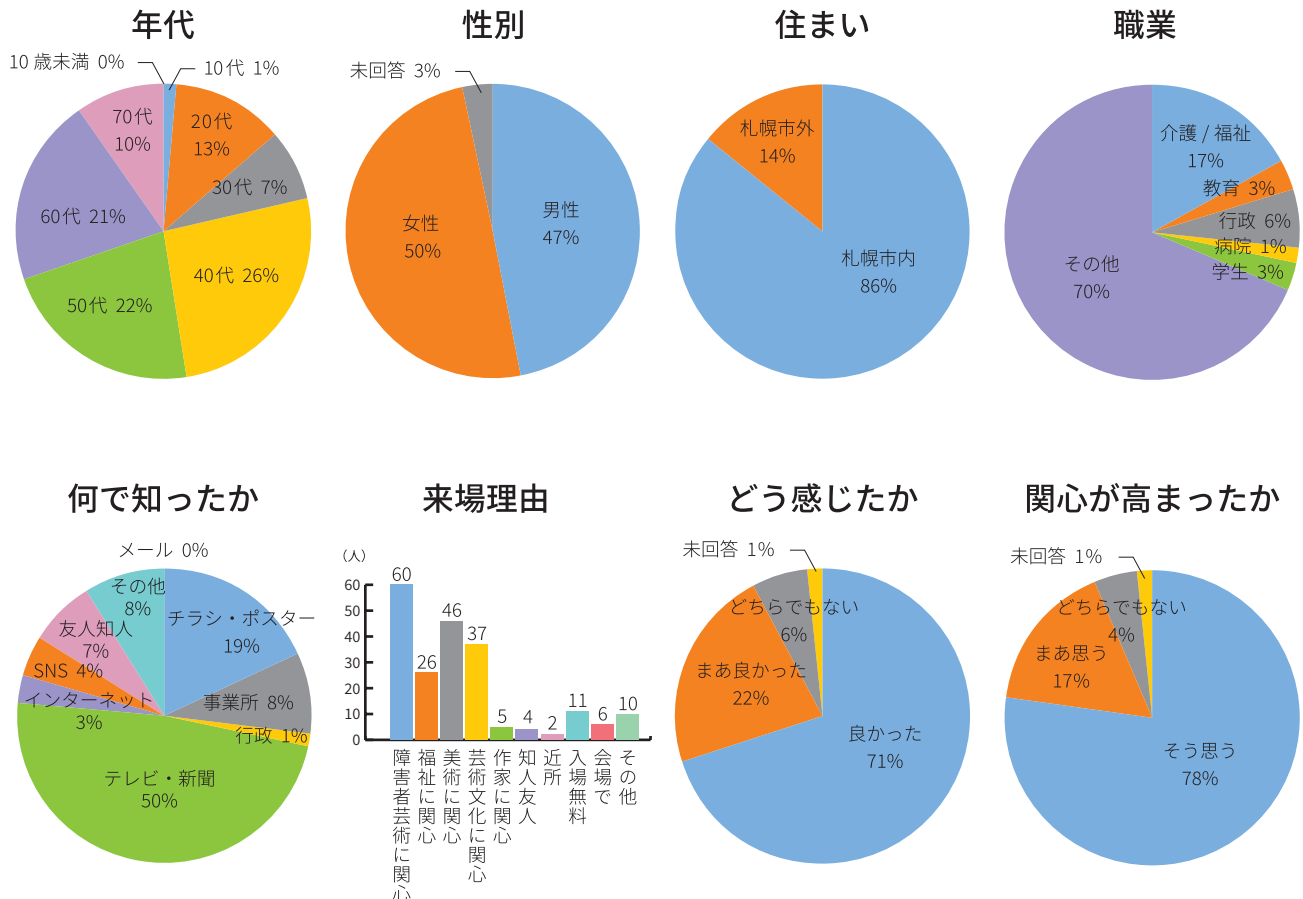


《わたしのすきなまち》（部分）

北海道・北東北の福祉とアート 始まりを探して 来場者アンケート札幌展 1、2

対 象：札幌展 1、2 来場者

回答数：72 件（回答率：11%）



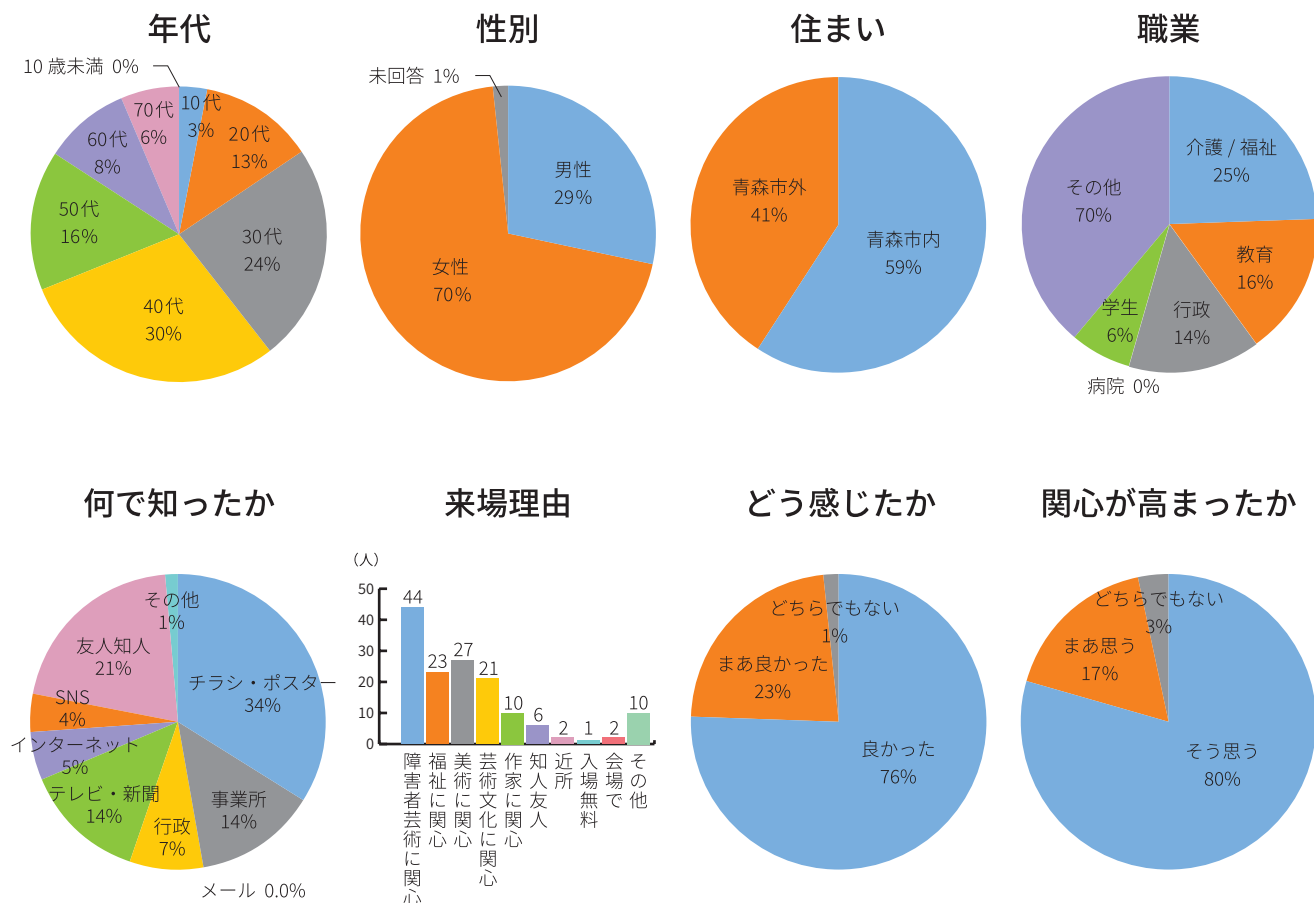
自由記述（抜粋）

●自らの内部の衝動（描きたい！描く！）で、ただ筆を持ち、クレパスを持ち、色とかたちを紙の上に表現する。いつもそばにいて創作を見守り続けてくれる人の存在も尊いものですね。ことばもなく圧倒されました。多くの人に知ってほしいですね。芸術の素晴らしき人が生きてゆく力になる芸術表現すること。人は表現することで生きられるのですね！ ●絵画技法について特別優れたものではなくとも非常に魅力的な心をひかれる作品が多い。 ●創作風景をもっと知りたい ●自分にはない着色、デザインが多く感銘を受けた。イナホ王子、これからたくさんかいてほしいです！ ●全ての作品に引き込まれ、時には涙が出そうになる作品もたくさんありました ●アーティストそれぞれの作風が興味深く、力をもらいました。会場で作者さん本人にも会え、お母様からお話をうかがえて、アール・ブリュットについてさらに関わってみたいと感じました。言葉で気持ちを伝える以上に気持ちが伝わってくる印象があり、そこに障害者とか健常者とか関係なくワクワクできるなど感じます。私は精神科の病院で作業療法士をしているのですが、自分の気持ちをうまく伝えられない患者さんが地域で生活するための支援の際、本人の気持ちが置き去りになってしまう場面を多く見てしまうことがあります。本人が本人らしくのびのびと過ごせる場で生活できるということについて改めて考えさせられました。コロナの中、来場しても良いものか迷いましたが、来て良かったです。今後の方向性を考える良いきっかけとなりました。 ●とてもすてきなものばかりでした。今後の活動も楽しみにしています。 ●就労支援に携わっていますが、ご自身の強みを最大限活かして生きておられる方々の作品を見ることができ、心うごかされました。 ●どの作品も、心にぐっとくるものがありました。すばらしかったです。私自身も福祉の仕事をしていて、こういったアートを見て感動しました。ありがとうございました。 ●クセがかなり多く、ナゾのみりよくをかんじた。

来場者アンケート青森展

対 象：青森展・青森ありのままの表現展（同会場にて開催）来場者

回答数：70 件（回答率：16%）



自由記述（抜粋）

●出展者個人のそれぞれの個性があり、心うたれました。指導し、見守られている方々のご努力も感じられました。●創作に向かう姿を想像しながら観させて頂きました。皆さんの思いに触れることができ、心温まるひと時となりました。●完成品だけでなく、制作過程や画材などの紹介もあり、作者がどのように制作しているのかイメージしやすかった。県内の公共施設や駅・バス停などに作品の展示があれば、もっと広く知っていただく機会になると思う。●パワーも頂きました。私も障害者で苦しい時もあり来させて頂きました。ありがとう。●一人一人の素直な表現が作品に込められていてよかった。芸術は障害の有無は関係なく自分の気持ち、思いを伝えるものだ改めて感じました。ありがとうございました。これからの活動も期待しています。●北海道・青森・秋田・岩手とあるが、東北一東日本一全国と規模が大きくなり、全国をまわってもらえればと思います。●知識ばかりにとらわれて作品を作っている自分がつらくて泣きたくなった。どれも素晴らしい。●そうあるべき、そうであるという意識を変えていいのだ。という思いを知った。力をいただいた。●とてもパワーがあって、見ていて笑顔になってしまいました。たくさんのステキな作品を作って下さって、また展示して下さいありがとうございました。私はお金を払ってみる価値があると思います。●障害を有する人と関わる機会があまりないが、彼らが何を感じているのか、芸術を通して知ることができた気がする。●とても面白かったです。欲しい作品もありました。また、事業所で芸術活動をどのように取り組んでいくか、日々考え悩んでいる真っ最中ですので、今日の刺激を活かしていこうと思いました。

関連企画：オンライントーク「帯広・愛灯学園の創作活動」

日時 2021年1月23日（土）14:00～15:00

ゲスト 梅田マサノリ（美術家・愛灯学園創作アドバイザー）、奥村愛美（愛灯学園職員・音楽療法士）

聞き手 大友恵理（社会福祉法人ゆうゆう 学芸員）

アールブリュット推進センター Gently YouTube チャンネルにてライブ配信およびアーカイブ公開

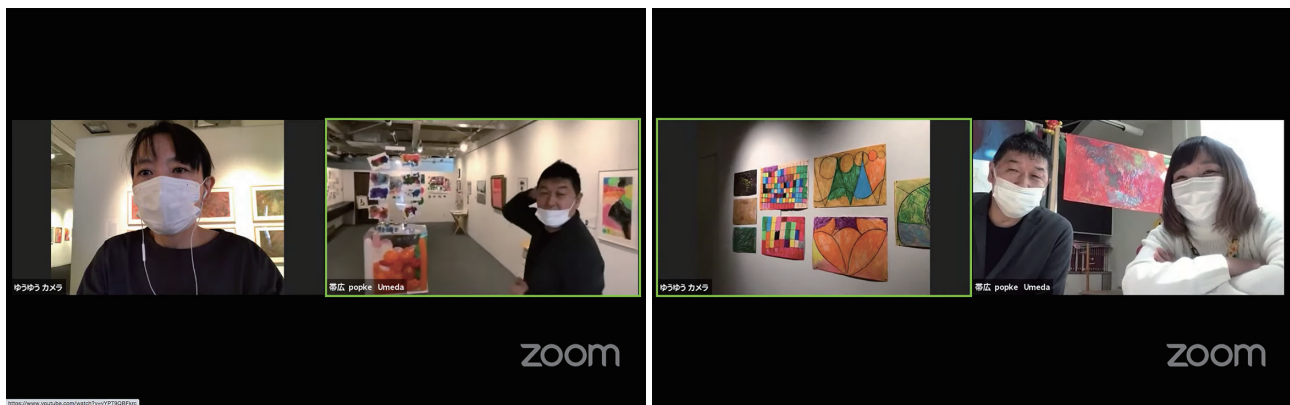


合同展「始まりを探して」の関連企画として、愛灯学園（帯広）の創作活動への取り組みを紹介するオンライントークをライブ配信しました。トークでは、合同展の会場と愛灯学園の創作アトリエをオンラインでつないで創作支援に携わるスタッフ二人に話をうかがいました。美術家の梅田マサノリさんは2016年から創作アドバイザーとして携わっています。奥村愛美さんは音楽療法士と介護支援員の両方を担う職員として愛灯学園に勤務しています。

今回合同展に参加した冬澤千鶴さんの所属する愛灯学園では「アートスペースぐるぐる」という創作活動があり、毎日利用者5～6名がアトリエに行き創作を行っています。午前中から入り、昼食の時間をはさんで午後3時頃まで。もう6年ほど続けているせいかメンバーはアトリエで各自席に着くと自分で準備して創作を開始します。その様子を支援員らが「あのパワーはすごい」「真似できない」と語ります。メンバーの成果物は毎年行う「LIFE 展」で紹介しています。ちょうど併設するギャラリーで終了したばかりのその展示の様子や作品もいくつか紹介してもらいました。

現在、愛灯学園では、利用者のアクティビティとして「アート」「音楽」「乗馬」という3つの柱があります。アートについては、元々1985年頃に始めた粘土・陶芸がありました。当時の日中活動は農業や養鶏などでしたが、そこに参加の難しい重度障害の人たちにとって出来そうな活動をとということで始まったそうです。「ぐるぐる」になったのは2014年。園舎新設によって空いた旧園舎をアトリエに利用することで創作活動が本格化しました。ここに梅田さんが創作アドバイザーとして加わり、2019年には現在の場所である地域活動拠点ポプケへ移りました。現在、梅田さん含む2名が常駐する形で運営しています。アートに続き音楽も、とくに太鼓はストレス発散への期待から利用者に体験・体感してもらおうと職員が考え、その思いをさらに膨らませられる専門家が入って活動が続いています。アートも音楽も旧施設を活用し、生活の場とは別の場所が出来たことで、利用者にとって「動の場所」として上手く機能している様子。また、乗馬・乗馬療育は、かつて馬と暮らしていた利用者にとって馬の世話が喜びになっていたことが分かり始まりました。現在2頭の道産子を飼育しています。

重度障害者が多いという愛灯学園。梅田さんは「メンバーの人たちと触れあいさせてもらって、彼らがどういう作品を作るのか垣間見て、何か面白さを見つける、そういう発見が自分たちは楽しい」と話します。創作活動を取り入れたい人へのアドバイスでも「面白いところを見つけられる」ために「利用者のことをじっくりと診る、温かい目で見守る」ことを強調しました。奥村さんは「愛灯には言葉でコミュニケーションをとる人が本当に少ない。絵も音楽も非言語的コミュニケーション。本能から出るものだと思うので、歌も太鼓も絵も、それをどう私たちが面白いねって言えるか」と話しました。



また、冬澤千鶴さんの創作活動について質問したところ、彼女にとって創作や音楽は「人生の小さな目標」と奥村さんが説明しました。以前はどちらかというとあまり動かず、職員にとって手の届かない利用者だったけれども、今は、絵を目標に日々の生活頑張るとか、ジャンベやりたいから日々の生活頑張ると言ってくれるようになったと言います。彼女は食事を取らず体調を崩してしまうことがよくあったけれども、「ぐるぐる行きたいから」「買い物に行くから」と食事を摂れることが多くなったそうです。「ぐるぐるも音楽も、その小さな生きるための目標になったらなと感じます。」

人材育成

作品調査勉強会

〈第1回〉講義①

日時 10月13日(火) 13:30～14:30

講師 横井 悠 (ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 主任学芸員)

参加者数 8名(6センター)

〈第2回〉講義②

日時 10月16日(金) 9:30～10:30

講師 菊地 雅子 (ボーダレスアートサポート北海道 代表)

参加者数 7名(6センター)



〈第3回〉ディスカッション編

日時 10月16日(金) 10:40～11:40

参加者数 7名(5センター)

「美術館学芸員であるアドバイザーから意見をもらいながら作品調査を行っているが、一般の美術と障害者の芸術とは異なる点も多いため、学びや情報交換の場が欲しい。」という支援センターの要望から本勉強会を企画しました。数多くの作品調査や、発掘を行ってきた専門家からノウハウを学び、それを各県やセンターの現状に即した方法やスタイルに変換して事業実施に生かしてもらうことを目的として、2名の専門家による講義とそれをふまえて行うディスカッションの場を設定しました。当ブロック内には支援センターが2団体しかありませんが、オンライン開催を活かし、ブロック外からも参加を募ったことで、ディスカッションの幅を広げることが出来ました。

○支援センターコメント

岩手県障がい者芸術活動支援センター かだあると 尾形渉

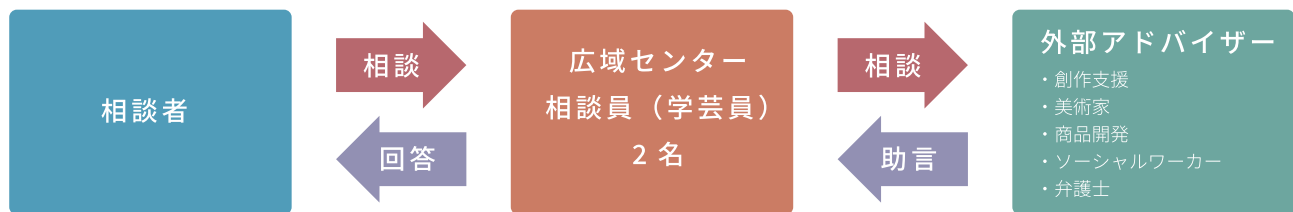
作品調査を行ううえで、どのような知識や視点が必要か模索しながら、今まで実施してきましたが、今回、お二人のお話を聞き、各支援センターの作品調査の現状について情報交換をすることで、これからの調査の方向性の整理に繋がりました。

第一に NO-MA の複数の外部調査員が関わり、それぞれの視点から調査を行う手法から、作品・作家を見る時は「それぞれが自分の視点を持っている。持っていていい。」という当たり前ですが、大きな気づきがありました。一方で「作品が良いと思えない時に自分の力不足を考える」という菊地さんのお話から、自分の視点を認めながらも自分の視点を疑う意識は並行して持っていなければならないと感じました。

また、「現物が残らない、消えていく作品だからこそその調査の重要性」、「作品・表現を見出すことによって生じる作家の表現の変化」から、外部から創作の現場に関わる人間が持つ責任の重さ、意思表示が難しい作家の作品を扱うことの責任の重さを改めて認識させられました。

作品調査について改めて考えると「芸術文化活動の実態把握」のために行う調査と「作品・作家の発掘」のための調査は視点も方法も別なものになると思います。どのように調査を行うのか手段のことを考える前に、何のために調査を行うのか目的を明確にすることが前提であり、一番重要なことではないかと感じました。

相談支援



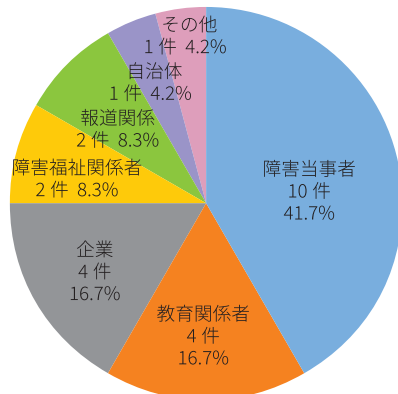
アールブリュット推進センター Gently では、未実施県である北海道と秋田県に在住の方を対象に相談窓口を開設しています。主に、センター担当者である学芸員 2 名が相談員として対応しており、適宜外部アドバイザーから助言を得られる体制を築いています。

本年度は主に、創作環境や創作支援、発表の機会、作品の二次利用や取材などの相談がメールまたは電話で寄せられました。北海道の方からの相談で特に多いのが、発表の機会を求めるものです。北海道には、障害のある人がだれでも自由に参加できる発表の場がなく、こうした相談に対しては、全国規模の公募展をご案内するにとどまっているのが現状です。また、秋田県の方に対しても相談窓口を開いていますが、本年度の相談はありませんでした。周知の課題に加えて、秋田県の方が、県外の団体が持つ窓口相談することのハードルも原因のひとつになっているのではないかと考えています。

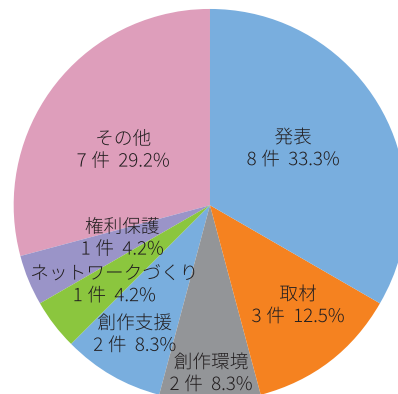
相談実績

相談件数 24 件

相談者



相談内容



情報収集・発信

これまでの活動の中で感じていた、「必要な人へ情報が届いていないのではないか」という情報発信の課題から、本年度は意識的にホームページでの発信回数を増やしました。昨年度から比べると、投稿数が3.5倍になり、閲覧数も1.7倍に増やすことができました。

ホームページでは6月から「〇月のお知らせ」と題した記事を投稿しています。ここでは、当センターに関する情報だけでなく、住んでいる場所に関わらず参加することができる公募展の募集情報やオンラインコンテンツ情報なども発信しています。さらに、北海道内の展覧会や、道内作家の展覧情報などを発信することは、当センターが所在し、未実施県でもある北海道のフォローとして重要な役割であると考えています。



12月にアールブリュット推進センター Gently を運営するゆうゆうの芸術文化推進室として Instagram アカウントを開設しました。このアカウントでも当センターの活動を積極的に発信しています。Instagram はこれまで活用してきた Facebook とは利用層が異なることが考えられるため、新しいつながりや新しいファンの獲得も期待されます。

○情報収集

全国連絡会議への出席や障害者芸術文化活動普及支援事業ホームページや郵送物、SNS などから全国の各センターや関係機関の情報を収集

○ホームページ・SNS での発信

ホームページ 投稿数 21 件、アクセス数 5814 件（昨年度比：投稿数 3.5 倍 アクセス数 1.7 倍）

〈関連する SNS での Gently に関する発信〉

北海道アールブリュットネットワーク協議会 Facebook ページ 投稿数 128 件、アクセス数 33498 件（昨年度比：投稿数 9.8 倍 アクセス数 5.8 倍）
ゆうゆう芸術文化推進室 Instagram 投稿数 31 件

○メディア掲載

- ・北海道新聞 2021 年 1 月 21 日 障害者アート、輝く個性 4 道県から 385 点、札幌で展示
- ・NHK 2021 年 1 月 22 日 札幌で障害者のアート作品展
- ・十勝毎日新聞 2021 年 1 月 24 日 札幌で障害のある人の作品展 愛灯学園の冬沢さんも出品
- ・月刊クオリティ 2021 年 3 月号 色彩豊かな絵・創作物、ズラリ 400 点 北海道・北東北の福祉とアート『始まりを探して』

○広報印刷物



アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台上がれ！」出演者募集チラシ



アール・ブリュットショウケース 2020 オンライン「舞台上がれ！」チラシ



北海道・北東北の福祉とアート「始まりを探して」チラシ

まとめ

○事業全体成果等

今年度は年間を通じてコロナ禍の対応に苦慮する1年となりましたが、とくに舞台芸術分野において、コロナ禍により当事者が発表どころか日々の練習や楽しささえ奪われていることが、ショウケースの参加者募集や準備過程で見えてきました。感染を危惧して事業を中止してしまうことは容易かもしれませんが、発表の機会はどんどん失われていきます。工夫や努力を惜しまず少しでも出来ることを考案し、感染対策を施して〈場〉を可能な限り確保することが、広域センターや支援センターの役割としていつにも増して大切となりました。

これまで整った舞台設備を当事者に提供することに一つのこだわりをもって開催してきたショウケースですが、オンライン開催に変更したことで、自宅や事業所の一角などどんな場所もステージとなって多くの人に表現を届けることが出来ることを、参加者たちの動画が伝えてくれました。公募部門への参加者が格段に増えたことから、今後オンライン開催を継続することで取り組み団体や個人の発掘の場としても期待されます。

また、今年度の事業では、支援センターの課題の一つでもあった、障害者の芸術文化活動への“関心”の高まりを“取り組み”へとつなげることを目指しました。創作活動や舞台表現などが福祉においてどのような意義や価値があるのか伝えることを念頭に組み立てていきましたが、特にインタビューや対談を随所に盛り込み、福祉現場や当事者のリアルな言葉や実践を数多く紹介することになりました。

ブロック内の支援センターに対しては、ブロック連絡会議やブロック連携事業の場を通じて浮上する悩みに応じて研修会等を企画実施することで速やかな状況改善に取り組んできました。3年、4年と実績を重ねてきた2つの支援センターの抱える課題は年々変化しており、今後はその解決に向けた研修会・勉強会等の拡充がより必要と考えます。

○ブロック内の連携の推進

前年度までに構築してきた関係性とコロナ禍によるオンライン会議の整備によりブロック内の連絡や意見交換が進み、ブロック連絡会議においても未実施県より参加が得られるなどネットワークの強化につながりました。

第1回会議 2020年6月18日 オンライン開催 参加者9名、オブザーバー3名 内容：今年度計画の共有、事業に関する情報共有と意見交換	第2回会議 2020年10月26日 オンライン開催 参加者8名 内容：各センター進捗状況の共有、ブロック連携事業に関する意見交換	第3回会議 2021年3月18日 オンライン開催 参加者7名、オブザーバー2名 内容：各センター事業報告、次年度事業に向けた意見交換
--	---	---

○未実施県の状況

北海道では、今年度策定が行われた第6期北海道障がい福祉計画において芸術文化に関する項目が盛り込まれ、支援センター設置や基本計画策定に向けた行政的基盤整備が進んでいます。

秋田県については、コロナ禍の移動制限などにより直接訪問は断念せざるを得ませんでしたが、県とのコミュニケーションを適宜はかりながら年間を通じて情報共有や事業周知などを行いました。県内の支援体制や支援センター設置に向けた模索が続いています。

○自治体の基本計画策定の状況

北海道：策定済み

青森県：未定

岩手県：策定済み

秋田県：予定なし

日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル in 北海道ブロックへの協力

「日本人と自然」を障害者の視点を通じて国内外に発信する「日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル」は、全国の50万人の関係者および厚生労働省と連携して、2020年より2年間で全国7つのブロックで開催されるもので、北海道では2020年10月に岩見沢市で開催されました。

当ブロックではこのフェスティバルへの協力を行之、とくに合理的配慮に関する実践を行うことで当ブロックにノウハウとして蓄積し、今後の実践モデルとなることを目指しました。

フェスティバル HP <https://artbrut-creation-nippon.jp/>

日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル in 北海道ブロック

会期 2020年10月3日（土）～12月20日（日）

会場 岩見沢アール・ブリュットギャラリー、市民交流施設であえる岩見沢、ほか

主催 文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた障害者の文化芸術活動を推進する全国ネットワーク、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル北海道ブロック実行委員会

共催 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた障がい者の芸術文化活動推進知事連盟、岩見沢市

連携 厚生労働省

後援 北海道

協力 北海道アールブリュットネットワーク協議会、北海道教育大学岩見沢校

■ ドライブインシアターによるバリアフリー映画上映

フェスティバルでは、感染症予防の観点から、バリアフリー映画の上映を劇場は使用せず、ドライブインシアター形式で行いました。

日時 2020年10月3日（土） 19:30～

会場 岩見沢市北村支所 駐車場

上映作品 「猫の恩返し」

上映協力 あしたのしあたあ



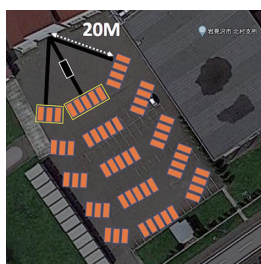
バリアフリー映画上映の様子



冒頭の上映案内（UDトーク、手話通訳）



音声ガイド（インターネット放送局）



見やすさの配慮（バリアフリー映画）



手話通訳の配置（インターネット放送局）

1. バリアフリーへの取り組み

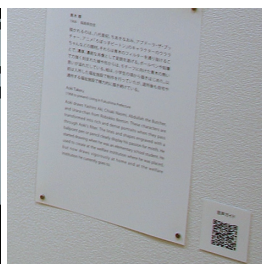
ウェルカムセンター	来場や鑑賞をサポートする窓口 会場の中核となる岩見沢アール・ブリュットギャラリーに設置し各会場をつなぐハブ的役割も担った	・会場やプログラムの案内 ・来場者の困り事、問い合わせへの対応 ・筆談ボード、コミュニケーションボードによる対応 ・手話通訳者の配置 ・カームダウンスペースの案内
筆談ボード、コミュニケーションボード	対話でのコミュニケーションが難しい方のためのツール。聴覚障害者（ろう、難聴）とのコミュニケーションに使用	各会場受付に筆談ボードを設置
カームダウンスペース	気分がすぐれない人、休憩したい人のため休憩室	ウェルカムセンターに隣接する岩見沢市シルバー人材センターに設置
ウェルカム電話、LINE	専用の問い合わせ電話および LINE を開設	会場への行き方、開催時間などイベントに関する様々な問い合わせに対応
車いす利用者の送迎対応	車いすユーザーのための無料送迎サービス 運行日：10/3・10/4	岩見沢駅と会場の間を運行。ウェルカムセンター（電話・LINE）にて受付

2. 情報保障への取り組み

手話通訳者の配置	10/3・10/4 展覧会（岩見沢2会場） インターネット放送局 FM ラジオ番組 ドライブインシアター	特に FM ラジオ番組では、放送時に文字情報と手話通訳をインターネットで同時配信
UD トーク	インターネット放送局 FM ラジオ番組 ドライブインシアター	ライブ配信の内容 文字情報をリアルタイムで提供
音声ガイド	展覧会（全3会場）	作家・作品情報を提供。QRコードよりスマートフォンを使って視聴可能
	インターネット放送局	YouTubeより、音声ガイド有・無2つのチャンネルで配信
	バリアフリー映画	ドライブインシアターでの上映。FM ラジオのチャンネルで音声ガイド有・無を選択
見やすさの配慮	展覧会における作品配置	車いす利用者に配慮し、作品を低めに設置し、動きやすいレイアウトに配置
	ドライブインシアターにおける優先席	弱視など字幕の必要な人の車両に対して、事前予約で把握の上、前方位置を提供



UD トーク（ラジオ放送の情報保障）



音声ガイド（展覧会）



見やすさの配慮（展覧会）

支援センター

青森アール・ブリュットサポートセンター（AASC）

実施団体：社会福祉法人あーど

2017（平成 29）年度より障害者芸術文化活動普及支援事業を受託し「青森アール・ブリュットサポートセンター」を設置しました。障害のある人からの創作環境や芸術文化の鑑賞に関する相談や、著作権の保護や二次利用に関する相談など幅広く対応し、展覧会やセミナー等を開催しながら青森県内の障害者芸術文化活動の活性化を目指しています。

●事業状況



●事業概要

〈相談支援〉

通年（電話、メール等にて対応）

10 件の相談

〈人材育成〉

支援者養成巡回プログラム（全 2 回）

セミナー「著作権について学ぼう」

ギャラリートーク「表現の現場から」

〈関係者のネットワークづくり〉

協力委員会（全 2 回）

〈発表等の機会の創出〉

評価委員会

青森ありのままの公募展（北海道・北東北の福祉とアート「始まりを探して」青森展）

〈情報収集・発信〉

全国連絡会議や北海道・北東北ブロック協議会等に出席

支援センターホームページにて主催事業について情報発信

●相談支援

担当者 相談支援兼事務担当 譚 詩鏞

対応時間 毎週月曜日～金曜日 9:00～17:00

対応方法 電話・メール

相談件数 10件

<主な相談内容>

「自分の作品を展覧会に出したい」、「イベント・芸文祭の開催にあたって協力してほしい」、「施設で創作活動を取り組みたいがやり方がわからない」、「法人独自で利用者さんの作品を集めて展覧会を開催したいがやり方がわからない」

●人材育成

支援者養成巡回プログラム

日時 令和2年10月21日、12月4日、令和3年1月12日、3月8日

会場 社会福祉法人ほほえみ会場、社会福祉法人あーど会場

講師 板垣崇志

参加者数 延べ31名

支援者養成巡回プログラムでは、県内2カ所の福祉事業所に対してそれぞれ2回のコンサルテーションを行っていただきました。初回のコンサルティングでは、利用者の芸術創作活動の様子を見ていただいた上でアドバイスを頂きました。講義・ワークショップは、当日の現場の状況を見てもらった上で決定してもらいました。例えば社会福祉法人あーどの場合、利用者はほぼ全員が重度の方で言葉によるコミュニケーションが取れなかったため、職員が障害のある方の役を演じ、ワークショップを行っていただきました。2回目のコンサルティングは、1回目以降の創作活動の取り組みの変化について把握していただいた上で、アドバイスをいただきました。講義・ワークショップは、芸術創作活動の支援方法だけでなく障害そのものについて深く考察を深めさせられる内容となりました。



ギャラリートーク「表現の現場から」

2021年2月14日 オンライン限定公開

日時 令和3年2月14日（日） 13:00～17:00

会場 オンライン限定公開

登壇者 大橋一之（社会福祉法人あーど）

今恵美子（特定非営利活動法人ドアドアらうんど・青森）

今井隆太（あおもりインクルージョンネットワーク）

視聴者 12名

参加者数 延べ31名

現場の創作者今恵美子さんから、創作活動に関する細かいこと、作品が生み出されるまでの流れにまつわる具体的な話をさせていただきました。コロナウイルスの影響によりオンライン開催となり、ギャラリートークの内容を録画し、事前申込の方を対象にオンラインにて限定公開することとしました。

セミナー「著作権について学ぼう」

日時 令和3年2月14日（日） 13:00～17:00

会場 オンライン限定公開

講師 天野高志（天野法律事務所）

視聴者 8名

創作活動に伴い、著作権、所有権、意匠権などの権利が発生します。天野弁護士に実際の相談事例を説明しながら、これらの権利の特徴や関係性について考察してもらいました。こちらもギャラリートークと同様にオンライン開催となり、内容を録画してオンラインにて限定公開することとしました。

●関係者のネットワークづくり

協力委員会

委員 相野 友樹（青森県健康福祉部障害福祉課社会参加推進グループ）

松倉 典子（公益財団法人こころすこやか財団）

遠藤 章子（一般社団法人青森県手をつなぐ育成会）

今井 隆太（あおもりインクルージョンネットワーク）

蒔苗 正樹（青森県立青森若葉養護学校）

一回目

日時 令和2年8月21日（金） 15:00～16:30

会場 オンライン会議

事業の目的及び事業計画を説明し、意見交換を行いました。

二回目

日時 令和3年3月18日（木） 16:00～17:30

会場 オンライン会議

今年度の事業の成果を報告し、来年度の事業に向けて意見交換を行いました。



●発表の機会の確保

青森ありのままの表現展

日時 令和3年2月13日～2月20日

会場 青森県立美術館

参加者数 約430名

青森ありのままの公募展については、青森県内の障害をお持ちの方から作品を公募し、県立美術館にて約180点の作品を7日間にわたって展示しました。陸奥新報、東奥日報、青森ケーブルテレビ等のメディアに取り上げられ、期間中の来場者数は約430名でした。アンケートの結果は99%が「とてもよかった・よかった」といった好評を頂きました。また、今回の展覧会では、県内の障害をお持ちの方々創作意欲を引き出すため、全応募作品に表彰を行いました。この取り組みも多方面から好評を頂いたので、次回からの取り組みに活かしていきたいと思います。



Castleen
Alaska
Faris
Requia
Have you not
Tinfalight

監主 大塚 ケイト

令和2年度青森県障害者芸術文化活動普及支援事業

青森ありのままの表現展

入場無料

会期 2021年2月13日(土)～2月20日(土)

時間 10:00～16:00

会場 青森県立美術館コミュニティギャラリー
青森市安田字道野185

主催 社会福祉法人あーるなど
(協賛) 青森県立美術館、アウトブット販売センター、あおもりインクルージョンネットワーク
後援 株式会社アーク東北支店、青森県目黒区、青森県文化財団、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業

お問い合わせ
青森アート・プロジェクトサポートセンター
〒037-0017 青森県五所川原市津軽町147-2 社会福祉法人あーる101号
TEL/FAX 0173-26-1021
Email aasc.aor@gmail.com
https://www.aasc.jp/

同時開催
北海道・北東北の福祉アート
始まりを探して
2月13日(土) 10:00～16:00
2月14日(日) 10:00～16:00

令和2年度 青森県障害者芸術文化活動普及支援事業

青森ありのままの表現展

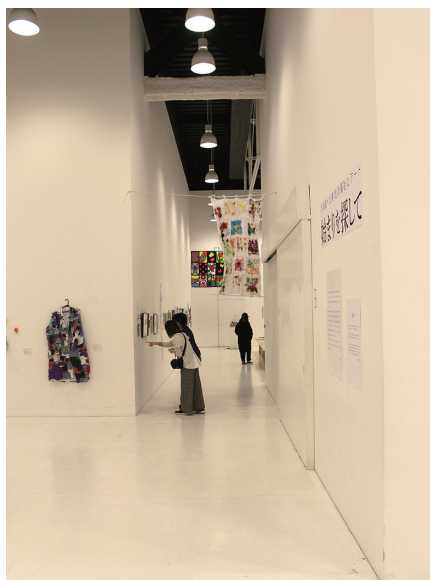
作品募集

応募受付期間
2020年12月1日(火)から
2021年1月7日(木)まで

※詳細は裏面の応募要項をご確認ください

主催 社会福祉法人あーるなど
(協賛) 青森県立美術館、アウトブット販売センター、あおもりインクルージョンネットワーク
後援 株式会社アーク東北支店、青森県目黒区、青森県文化財団、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業、青森県障害者芸術文化活動普及支援事業

お問い合わせ
青森アート・プロジェクトサポートセンター
〒037-0017 青森県五所川原市津軽町147-2 社会福祉法人あーる101号
TEL/FAX 0173-26-1021
Email aasc.aor@gmail.com
https://www.aasc.jp/



●情報収集・発信

○情報収集

全国連絡会議や北海道・北東北ブロック協議会等に出席しました。会議を通じて、全国の各支援センター・広域センターの取り組みやイベント情報を収集し、ホームページ等のインターネット上にて情報発信を行いました。また、青森県内に各福祉施設等に協力関係を築き、今後に事業の発展にも繋がると考えられます。

○ホームページ・SNSでの発信

ホームページ／投稿数 10 件、アクセス数 784 件

○メディア掲載

- ・東奥日報 2021 年 2 月 17 日
青森県美で「ありのままの表現展」
- ・陸奥新報 2021 年 2 月 14 日
県美で「ありのままの表現展」開幕
- ・青森ケーブルテレビ 2021 年 2 月 14 日
ニュース

●まとめ

青森アール・ブリュットサポートセンターでは、県内の障害者の創作活動支援の取り組みがけっして多くない中で普及啓発に取り組んできました。公募展への応募数が増えたり、来場者から好評の声が多く聞こえるなど、少しずつではありますが成果が見えつつあります。一方福祉現場では、人手不足の影響も深刻であり、創作活動を行うためには一層の工夫が必要な状況にあります。そのような背景もあり、セミナーを行うだけではなく実際に現場にコンサルタントを派遣し、現場の実情に合わせた支援を行うべく支援者養成巡回プログラムを事業に加えました。平川市、五所川原市、青森市の計 4 法人への支援を計画しましたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、2 法人の実施に止まりました。

コンサルタントの板垣氏から岩手県内の福祉事業所での取り組み事例の紹介をはじめ、作品の見せ方や支援活動をどう広げていくかなど興味深い話をしていただきました。参加者から回収したアンケートでは、「芸術創作活動の支援方法だけではなく、障害についての考え方も深められた」「来年度に事業所の利用者さんの作品を集めて、独自の展覧会を開催してみたい」「ワークショップがとても勉強になった。また参加したい」といった声が寄せられ、今後の支援活動に成果が期待される結果となりました。この取り組みを通じて、現場における障害者の創作活動をより一層支援していけるよう継続していきたいと思っています。

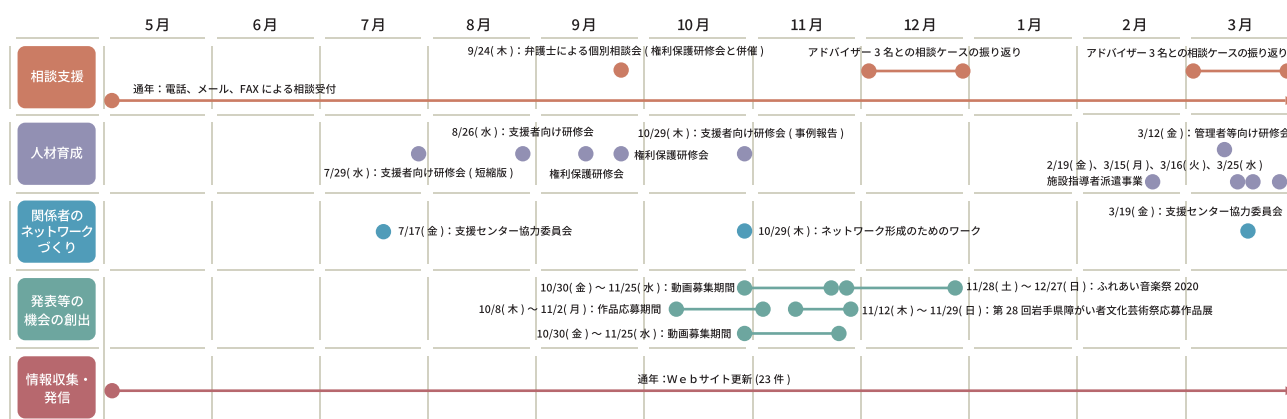
支援センター

岩手県障がい者芸術活動支援センター かだあると

実施団体：社会福祉法人岩手県社会福祉事業団

岩手県障がい者芸術活動支援センター かだあるとは社会福祉法人岩手県社会福祉事業団が岩手県より委託を受けて 2018(平成30)年に開設しました。支援センターの愛称である「かだあると」は「参加する、集う、加わる」という意味の岩手の方言「かだる」とエスペラント語で芸術を意味する「Arto(あると)」を組み合わせた造語です。障がいがあっても無くても誰もが参加できる「創作・表現」の場を作ることを大きな目標に掲げ、相談業務、各種研修会の開催、公募展の開催をとおり、岩手県内の障がい者文化芸術の裾野を広げるために活動しています。

●事業状況



●事業概要

〈相談支援〉

23件の相談(相談回数54回)

〈人材育成〉

- 支援方法や支援意識に関する研修会2回(うち1回は短縮版を夜間帯に開催)
- 著作権等の権利保護に関する研修会2回(弁護士による個別相談会を併催)
- 実践報告とパネルディスカッションの研修会
- 管理者等を対象とした研修会
- 事業所への指導者派遣(感染症対策の為にリモートで実施)

〈関係者のネットワークづくり〉

- 年2回支援センター協力委員会を開催、意見交換をとおり関係構築を図る
- 10/29(木)研修会にてネットワーク構築を目的としたワークを実施

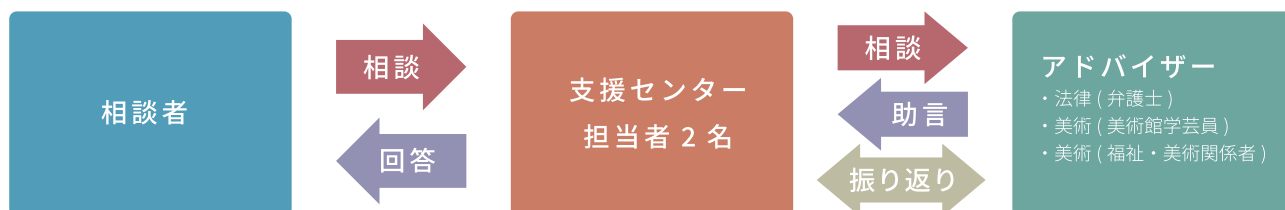
〈発表等の機会の創出〉

- 第28回岩手県障がい者文化芸術祭応募作品展(355点)
- ふれあい音楽祭2020(応募動画をWebで公開・9団体)

〈情報収集・発信〉

- 支援センターホームページにて主催事業、他団体事業について情報発信

●相談支援



電話、FAX、メールにて相談を受け付け、支援センター担当者2名が回答しました。すぐに回答が難しい相談については、情報収集のうえ回答することとし、支援センターのみで回答が困難なケースについては、適宜アドバイザーに助言を求め、アドバイザーの助言を受けて相談者に回答しました。

相談ケースについては定期的にアドバイザーとの振り返りを実施しました。アドバイザーからの助言を受けず、支援センターのみで回答した相談についても、今後の対応に活かしていけるよう、対応が適切だったのかを検証しています。

相談件数 23 件 (相談回数 54 回)

●人材育成

障がいのある人の創作・表現活動に関する研修会 ～福祉的支援からアート支援へ～

日時 ①短縮版 令和2年7月29日(水) 18:00～20:00

②通常版 令和2年8月26日(水) 14:00～18:00

会場 いわて県民情報交流センターアイーナ 会議室 804

講師 板垣崇志(るんびにい美術館)

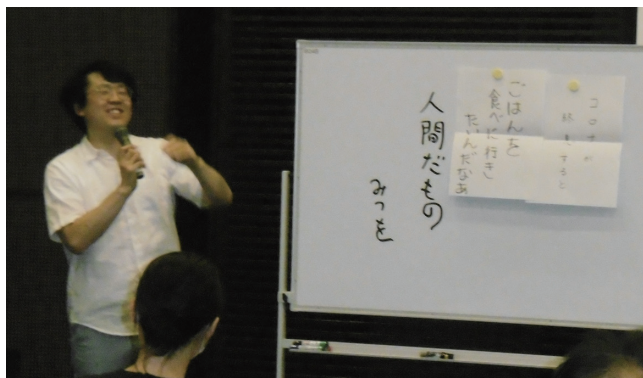
参加者数 ①短縮版 16 名

②通常版 24 名

平成29年度から毎年開催している研修会で、今年で4年目の開催になります。福祉支援からアート支援への意識変革を促す体感的なワークショップです。ペアワークを中心に行い、無言で絵を描く人、じっと観察する人、二つの役割を入れ替えて行う「相互観察のワーク」を通して、作品ではなく表現する行為を見つめる重要性を感じ、アート支援が意思決定支援の連続であることを学びました。勤務後や個人の時間を活用して研修会に参加したいとの声を受けて、毎年好評の「福祉支援からアート支援への意識変革を促す体感的なワークショップ」を通常開催の他に、短縮版を夜間に開催しました。勤務後に参加した障がい福祉サービス事業所職員の他、特別支援学校からも夜間の方が参加し易いとの声を頂き、多くの参加を頂きました。

アンケートコメント

- ・活動の中で支援者側の意見をよく言うてしまうが、後追い支援を心がけていきたい。
- ・作品はその人の分身、作品は人という講師の言葉がとても印象に残った。



障がいのある人の創作・表現活動支援に関する研修会～しる・つながる・ひろがる～

日時 令和2年10月29日(木) 14:30～17:30

会場 いわて県民情報交流センターアイーナ 会議室 803

講師 岩館俊明(社会福祉法人のぞみ会 希望ヶ丘学園)

田崎寛(アトリエ田崎)

岡部兼芳(社会福祉法人安積愛育園 はじまりの美術館)

佐藤雅俊(社会福祉法人安積愛育園 地域生活サポートセンターパッソ)

参加者数 17名

障がいのある人の創作・表現活動の様々な実践例や創作・表現に対する向き合い方を知ることを目的として、立場の異なる3名の実践者を講師として迎え、実践報告とパネルディスカッションを行いました。県内の障がい福祉サービス事業所で、近年、積極的に活動をされている希望ヶ丘学園。障がいのある作家の親の立場から、様々な活動をされている田崎寛さん。県外で長年、先駆的な活動をされている社会福祉法人安積愛育園さんからは、展示施設を持ち、中間支援を行うはじまりの美術館と現場で創作支援を行う地域生活サポートセンターパッソ。それぞれから、自分の施設や団体での活動についてお話をいただきました。立場の異なる4名の講師から、共通して利用者の創作・表現に寄り添い、支える姿勢を学ぶことができました。

感染症対策の観点から、昨年度実施した、参加者同士が自分の事業所等の現状や課題や今後の希望や展望を共有するグループワークは方法を変え、個人ワークとして実施し、会場内に掲示することで、参加者同士の情報共有を図りました。

アンケートコメント

- ・結果を早急に求めてしまいがちなので、利用者のペースに合わせていきたい。
- ・自分の業務や支援と照らし合わせながら、話を聞くことができて良かった。



障がいのある人の創作・表現活動支援に関する研修会～施設・事業所管理者編～

日時 令和3年3月12日(金) 14:00～16:45

会場 【方法】Zoom ミーティング

講師 宮本恵美(社会福祉法人みぬま福祉会 工房集)

板垣崇志(るんびにい美術館)

参加者数 17名



障がい福祉サービス事業所の管理者、係長や主任等の現場レベルでの責任者、創作活動や日中活動の担当者等の創作・表現活動支援において一定程度の権限を持つ職員を対象とした研修会を開催しました。創作活動を実施することで、事業所に期待される多面的な効果について紹介し、事業所における創作活動の普及啓発を進めると共に、現在の事業所での創作支援の在り方について改めて考えることを期待したものです。工房集宮本さんに管理者の立場から、工房集の立ち上げから現在に至るまでのエピソードを通して、創作支援で大事にしていることについてお話をいただき、事業所として創作・表現活動支援を進めていくことの意義について学ぶ機会となりました。

アンケートコメント

- ・現場レベルでの創作支援の盛り上げを、事業所全体に広げていきたい。
- ・なんのための創作活動をするのか、改めて考えることができた。

著作権等の権利保護に関する研修会

日時 ①令和2年9月15日(火) 13:00～17:00

②令和2年9月24日(木) 13:00～17:00

会場 ①イーストピアみやこ(宮古市)

②ふれあいランド岩手(盛岡市)

講師 松岡佑哉(石川法律事務所)

菊池剛(岩手県文化スポーツ部文化振興課)

参加者数 ①4名

②9名

岩手県が策定した「障がい者芸術文化作品における作家の権利保護に関する指針」について、岩手県文化スポーツ部文化振興課より、策定経緯とその内容について説明頂きました。また、岩手県内の障がい者文化芸術に関する取組みについて併せて説明いただきました。著作権の基本的な内容に関しての講義は、支援センターのアドバイザーとして、相談支援にも携わっている松岡弁護士から、相談支援での実際の事例も交えながら説明いただきました。法的な原則論はしっかりと抑えながらも、実際の現場では対応が難しい事例について、実務上とれる対応を紹介いただき、実践で活用できる内容となりました。

また、講義後に個別相談会を開催し、講義中の質疑では解決できないような個別的な事案については直接、弁護士に相談することで、参加者が事業所で抱えている著作権に関する問題を整理する機会となりました。

アンケートコメント

- ・利用者が他者の著作権を侵害してしまう可能性があることを知った。
- ・理解しにくい分野に思えたが、事例が盛りだくさんで幅広く知識を得ることが出来た。



障がい者アート商品化講演会

日時 令和2年9月24日(木) 10:00～17:00

会場 ふれあいランド岩手(盛岡市)

講師 木村静恵(地域活動支援センター工房てんとう虫)

参加者数 9名

県内の障がい福祉サービス事業所でアート作品を活用した商品展開や、商利用を実施している事業所はまだまだ、少なく、著作権について学ぶ必要性を感じていない事業所、支援者も多いことから、実際に商品化を行っている事業所の担当者をお呼びして、お話しいただくことで、参加者が商品化についてのイメージを持ち、今後の商品展開等に繋がることを期待して開催しました。

地域活動支援センター工房てんとう虫の木村所長から、事業所の立ち上げにまつわる地域との連携や創作活動や展覧会の様子、ポストカードや便箋等への商品化の具体的な流れについて説明を頂くとともに、商品化することの意義についてお話しいただきました。

アンケートコメント

- ・商品化に向けた具体的な取り組みについて聞けてイメージがついた。
- ・実際に商品化された実物を見ることができて良かった。



障がいのある人の創作活動支援ワークショップアドバイス

日時 ①令和3年2月19日(金)、②3月15日(月)、③16日(火)、④25日(水)

会場 Web 開催 (Zoom ミーティング)

講師 那須賢輔 (prop)

参加者数 16 名

障がいのある人の創作・表現活動を行う事業所に指導者を派遣し、実際の創作活動を通して、支援技術を伝えることを目的に実施しました。当初は指導者が実際に現場を訪問して、現場の状況を聞き取り、事業所の利用者さんに向けた創作活動の内容を検討、実施する中で職員への気づきを促す内容を検討していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、指導者が現場を訪問するのは難しい状況となりました。そこで、Zoom ミーティングを活用したリモート講習に方向を転換し、①講師から職員への聞き取り、②創作活動の内容を職員へ伝達、③職員が利用者に向けて創作活動を実施、④講師による職員への振り返り、の4つの段階を通して、実際の創作支援での支援技術を学ぶ内容としました。

参加した事業所は普段は塗り絵などの活動が多いとのことでしたが、利用者が一から幾何学模様を描き、それに着色する内容を講師から提案し、実施しました。普段の活動では見えてこなかった利用者さんの個性ある創作・表現が引き出され、今後も事業所において普段の活動への工夫が期待される結果となりました。



●関係者のネットワークづくり

協力委員会を年に2回開催しました。1回目は今年度の事業計画について説明、意見を頂き、事業計画に反映をしました。2回目は今年度の事業報告を行い、各事業について意見を頂き、来年度の計画に反映をしました。協力委員会以外の場でも研修内容についての相談や、相談対応についての相談など、年間を通して各分野の関係者と連携して事業を実施してきました。

●発表の機会の確保

第28回岩手県障がい者文化芸術祭

日時 令和2年11月12日(木)～11月29日(日)

会場 ふれあいランド岩手エントランス～ふれあいホール前

入場者数 1,302 人

岩手県内の障がいのある人の、日ごろの文化芸術活動の成果を発表する機会として、全県下の障がい福祉サービス事業所、特別支援学校、精神科病院、障がい福祉関係団体、個人などから355点(絵画124点、書道34点、写真24点、工芸154点、文芸19点)の応募を頂き、そのすべてを展示しました。感染症対策を講じることで、会場、期間については例年通りに実施することができました。新型コロナウイルスの影響で様々な活動が制限される1年でしたが、作品展示については大きく影響を受けることはなく、外での活動ができないこともあってか例年以上の応募数と緻密な作品や大きな作品など力を入れた作品も多く、創作・表現の魅力を伝えると共に、創作・表現の持つ力を感じる展示となりました。



ふれあい音楽祭 2020

日時 令和2年11月28日(土)～11月27日(日)

開催方法 YouTube チャンネルでの動画公開

参加者数 9 団体応募

視聴回数 851 回



毎年開催している公募型音楽祭「ふれあい音楽祭」は新型コロナウイルスの影響により、会場での開催を見合わせることで、代わりに、合唱やダンス、バンド演奏の動画を募集して、特設ホームページで公開することとしました。動画の撮影環境が無い人や方法が分からない人に向けては撮影会を開催しフォローしました。全9団体に応募いただき、多種多様なパフォーマンスを広く公開することができました。毎年の開催を楽しみにしている皆さんが会場に集まらなかったことは残念でしたが、動画応募・Web 公開で開催することで、県内のみならず世界に向けて広く皆さんの活動をお伝えできたことや例年であれば開催地が遠方のため参加出来なかった人が参加し、新しい繋がりが出来たこと等メリットも感じられる取組みとなりました。

●情報収集・発信

○情報収集

全国連絡会議に出席し、全国事務局や各広域センター、各支援センターから情報を収集するとともに北海道・北東北ブロック連絡会議に出席し情報交換を行った。

○ホームページ・SNS での発信

ホームページ／投稿数 23 件

○広報印刷物



支援センターリーフレット (表面)

障がいのある人の創作・表現活動支援に関する研修会チラシ (チラシ：表面)

創作活動に関する権利保護研修会チラシ (チラシ：表面)

障がいのある人の創作・表現活動支援に関する研修会～つながる・ひろがる～チラシ (チラシ：表面)

障がいのある人の創作・表現活動支援に関する研修会～施設・事業所等管理者編～チラシ (チラシ：表面)

障がいのある人の創作活動支援ワークショップアドバイスチラシ (チラシ：表面)

●まとめ

相談窓口を開設し、3 年目となる今年度は支援センターのリーフレットを更新し、県内の障がい福祉サービス事業所、特別支援学校、精神科病院、自治体、公共文化施設、盛岡市内ギャラリー等に送付し配架を依頼しました。特に公共文化施設や盛岡市内ギャラリー等への配架により、個人やそのご家族からの相談数が今年度は増加しました。障がい福祉サービス事業所以外の様々な立場の方からの相談が増加する中で、支援センターのみで対応が難しいケースも増加しており、関係機関へつなぐことや地域の社会資源を活用する等の対応を検討していく必要があります。また、3 年目となり、蓄積してきた相談対応方法や関係者とのつながりで解決に至った相談が複数件ありますが、まだまだ属人的な対応であり、相談対応に必要な情報等を整理し、今後、誰でも対応できる仕組みの構築が求められます。

作品調査については、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、事業所等の創作現場への訪問が難しくなりました。そこで、ブロック合同展への出展を見越して、すでに情報がある作家への再調査が主となりましたが、創作の変遷について事業所担当者等に電話等での聞き取りを行うことで、新たな面を発見することに繋がりました。調査結果について、現状では展示に繋げるのみとなっているため、今後は作品、作家、事業所の取組み等を紹介する方法を検討していきます。

支援者ネットワークの構築については、「ネットワーク構築を目的としたグループワーク」が新型コロナウイルス感染症の影響により実施することができず、十分な取り組みを行うことができませんでした。外部研修への参加を控えている事業所も多い中で Web でのネットワークの構築と、その活用方法について検討していきます。

新型コロナウイルス感染症の影響のため、研修や音楽イベント等、一部 Web での開催に変更しました。その結果、参加が可能となった方もおり、今後の感染症の状況に応じて、Web での開催の利点を見直し、多くの方が参加できる形を検討していく必要があります。

センター 一覧

広域センター

アールブリュット推進センター Gently

実施団体：社会福祉法人ゆうゆう

〒061-0231 北海道石狩郡当別町六軒町 70-18

社会福祉法人ゆうゆう内

Tel 0133-22-2896 Fax 0133-23-0811

E-mail gently@yu-yu.or.jp

<http://gently-artbrut.com>



支援センター

青森アール・ブリュットサポートセンター (AASC)

実施団体：社会福祉法人あーると

〒037-0017 青森県五所川原市漆川鍋懸 148-2

社会福祉法人あーると内

Tel 0173-26-1021 Fax 0173-26-1021

E-mail aasc.aorld@gmail.com

<https://www.aasc.jp/>



岩手県障がい者芸術活動支援センター かだあると

実施団体：社会福祉法人岩手県社会福祉事業団

〒020-0114 岩手県盛岡市高松 3 丁目 7 -33

社会福祉法人岩手県社会福祉事業団 事務局内

Tel 019-656-7081 Fax 019-681-2514

E-mail kadarto@iwate-fukushi.or.jp

<http://www.iwate-fukushi.or.jp/>



厚生労働省 令和2年度障害者芸術文化活動普及支援事業

北海道・北東北ブロック報告書

発行日 2021年3月31日

協力団体

アール・ブリュットショウケース2020オンライン「舞台上がれ！」

一般社団法人にじいろ福祉会 チャレンジキャンパスさっぽろ

医療法人社団楽優会 札幌なかまの杜クリニック

岩手県立盛岡視覚支援学校

社会福祉法人帯広福祉協会 愛灯学園

社会福祉法人義栄会 月見野作業所

社会福祉法人義栄会 夢香房すてっぷ

社会福祉法人光林会

社会福祉法人塩谷福祉会

社会福祉法人鷹栖共生会 旭川ヒューマンサービスセンター

社会福祉法人当麻かたるべの森 かたるべの森美術館

社会福祉法人ほほえみ

多機能型事業所わかくさ

のびっこ寮育センター

放課後等デイサービスほたて

北海道白樺高等養護学校

北海道紋別高等養護学校

北海道・北東北の福祉とアート「始まりを探して」

アトリエペンダ

社会福祉法人帯広福祉協会 愛灯学園

社会福祉法人光林会 るんぴにい美術館

社会福祉法人当麻かたるべの森 かたるべの森美術館

社会福祉法人盛岡市民福祉バンク

特定非営利活動法人ドアドアラウンド・青森

特定非営利活動法人逢い ぼぼろの家

NPO 法人アートリンクうちのあかり

デザイン 真砂雅喜

発行

アールブリュット推進センター Gently

事務局 社会福祉法人ゆうゆう

〒061-0231 北海道石狩郡当別町六軒町70-18

Tel 0133-22-2896 Fax 0133-23-0811

E-mail gently@yu-yu.or.jp

発行責任者 大原裕介

